らんちゅう掌編小説集『獲物』

らんちゅう

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
らんちゅう掌編小説集『獲物』

【Ｎコード】
Ｎ７０１６Ｄ

【作者名】
らんちゅう

【あらすじ】
　空いた時間でサクッと読める《一話完結型の『エロショート・ショート』掌編小説集》
南の島で二人の日本兵が狙う獲物とは……「獲物」、若い男を連れ込んだ妻が、夫の浮気現場に鉢合わせて発生するドタバタ劇……「修羅場の夫婦」、淡い初恋の相手と結ばれた二人だが……「馬鹿だよ、お前は」、家族に囲まれた幸せな誕生日を祝った男の末路は……「幸せな誕生日」／他に「ブ男の願い」「スペース☆ハーレム」「密室」「還暦の童貞男」「パンティーになった僕」「コレクショ

ン」「透明人間の一日」「噛まれたい女」「家畜男達の受難」「エロでエコ」「透明人間になった僕」「僕はバナナ」「デスマンコ」「悪魔の芽」の珠玉（？）の掌編全１８編を収録。
とりあえず完結ですが、掌編小説集なので新たな作品を書いたら、順次追加する予定です。
今後の参考の為にも、この作品が良かったなどの感想を頂けると、とても嬉しいです。
※ショートショートとは、短編小説よりも短い小説のことです。ジャンルは、ＳＦ、ミステリー、ユーモア小説など様々。アイデアとオチに面白みを持たせる傾向があります。

作品紹介

作品紹介

１【ブ男の願い】（ＳＦコメディ）　読了時間：約７分（３，６４６文字）

全く女性にモテないブ男がタイムマシンで未来に行くと、なんとそこは美男美女の世界だった……。

２【スペース☆ハーレム】（ＳＦ）読了時間：約６分（３，００８文字）

人類初の恒星間有人飛行。船内では黒人・白人・日本人の３人の美女達とのハーレム生活が……。

３【密室の五人】（サスペンス）読了時間：約９分（４，３４０文字）

密室に閉じ込められた五人の男女、果たして彼らの関係は……。

４【還暦の童貞男】（現代文学）読了時間：約９分（４，５７９文字）

定年を向かえた童貞男性が一人の少女と出逢って初体験を……そして、その結果。

５【パンティーになった僕】（ファンタジー）読了時間：約５分（２，５６６文字）

朝起きたらパンティーになっていた僕は、大好きな女の子に穿かれて……。

６【コレクション】（カニバリズム・ホラー）読了時間：約７分（３，５９６文字）

何故か男性について来てしまった私は、彼に体の部位を次々と食べられていく……。※少々グロいので注意して下さい。

７【透明人間の一日】（コメディ）読了時間：約８分（４，１６１文字）

人里離れた薬品会社の研究所で、「透明人間」になった男性がとった行動とは……。

８【噛まれたい女】（詩小説）読了時間：約２分半（１，２０２文字）

噛まれたい願望の女性が迎えた結末とは……詩小説風ですが、一応、オチはあります。

９【家畜男達の受難】（ＳＦコメディ）読了時間：約１０分（５，０００文字）

男性は精子の供給源として政府が管理する社会。セックスをしたい女性達が取った行動とは……。

１０【エロでエコ】（コメディ）読了時間：約２分（１，１３２文字）

セックスで発電する、ただそんなお話です。

１１【透明人間になった僕】（切ない系ファンタジー）読了時間：約６分半（３，２２７文字）

何故か透明人間になった僕は、幼馴染の彼女の部屋に……僕の目の前で彼女はオナニーを始め……。

１２【僕はバナナ】（ファンタジー）読了時間：約１分半（７９８文字）

朝起きたら、僕はバナナに……「大好きな人に食べられたい」そんな願望のお話です。

１３【デスマンコ】（エロチックホラー）読了時間：約１１分（５，６７６文字）

死神から得たのはエッチした相手を殺せるあそこだった……。

１４【悪魔の芽】（ブラックコメディ）読了時間：約６分半（３，３１５文字）

修道女を目指す美少女が神父にオナニーを見つかりクリトリスを切除される……。

１５【幸せな誕生日】（現代文学）読了時間：約５分（２，５８３文字）

家族に囲まれた幸せな誕生日を祝った男の末路は……切ない系のお話です。

１６【馬鹿だよ、お前は】（恋愛）読了時間：約４分（２，１２８文字）

淡い初恋の相手と結ばれた二人。だが彼女はその時もうすでに……切ない系のお話です。

１７【修羅場の夫婦】（コメディ）読了時間：約７分半（３，９２６文字）

若い男を連れ込んだ妻が、夫の浮気現場に鉢合わせて発生するドタバタ劇……。

１８【獲物】（現代文学）読了時間：約５分（２，３３６文字）

南の島で二人の日本兵が狙う獲物とは？　※これは読んだら厭な気持になれる小説です。

1　ブ男の願い（前書き）

女性に全くモテないブ男がタイムマシンで未来に行くと、そこは美男美女の世界だった……

（ＳＦコメディ）

1　ブ男の願い

「博士、これがタイムマシンですか？」とエヌ氏は目玉を丸くして尋ねた。
「そうだよ。ついに長年の研究の成果が身を結んだのだ」と博士は感慨深げに答えた。
　二人の目の前には、直径二メートル程の銀色に輝く球状の物体がある。
　扉が開いており、中には椅子があった。

「これで、時間移動が出来るのですね」
「うむ、そうだが、まだちょっと問題があっての」
「どんな問題ですか？」
「向こうに送り込む事は出来るのだが、連れ戻す事は出来んのじゃよ」
「って事は、未来に行ったら、もう帰って来れないのですか？」
「いや、今、連れ戻す方法を研究中なので、それが完成すれば、連れ戻せる筈じゃ」
「博士、ぜひ私を未来に送って下さい」
「しかし、何時になったら連れ戻せるか判らんのだぞ」
「構いません。正直言って、私は全然女性にモテないのです」
　博士はエヌ氏をじっくりと眺めた。
　背が低くて、かなりのデブ。顔も、はっきり言ってすごく不細工である。まさに正真正銘のブ男である。
（確かに、これじゃ、女性にはモテないだろうのう）

博士はエヌ氏に同情を感じ始めた。
「今の女性達は、やれイケメンじゃないと、やれ背が高くないと、やれ高級車に乗ってないと、やれ金持ちじゃないと、云々、私なんか、全く相手にされないのです」
「ふむふむ」
「私は、見てのとおりのルックスですし、金もなければ、車もない」
「そうじゃのう」
「もうこの時代にはほとほと嫌気がさしているのです。未来に行ってみれば、何か変わっているかもしれません。ぜひ、私を未来に送り込んでください」

エヌ氏は、淡い期待を持っていたのだった。
(未来では、世の中の男性は、皆、俺より不細工になっているかもしれないぞ……)

「本当にいいのじゃな?」
「はい、私の決心は固いです！　一度でいいから、美女とエッチをしてみたいのです！」
「よし、判った。君の希望を叶えて進ぜよう」
エヌ氏は、タイムマシンに乗り込み、椅子に座った。
博士が、機械を操作している。ブルブルと小刻みに振動し始めた。
「それでは、気をつけて行ってくるんじゃぞ。必ず迎えに行くからな」そう言って、博士は扉を閉めた。
ブィ～～～ンという音と共に、振動が激しくなった。そして、十

五秒程で振動が止まった。
エヌ氏は、おそるおそる扉を開けて、外に出てみた。

そこは、緑の芝生の真ん中だった。どうやら公園の様である。
大きな木々が生えており、美しい花々が咲き乱れている。
そして、目の前には、雲にも届きそうな超高層ビルが建っていた。
空を見上げると、何台もの車が空を飛んでいた。
どうやら、かなり先の未来にやって来たようである。

エヌ氏が「さてどうしようか」と考えていると、タイムマシンを見つけた人々が近寄って来た。
そしていつの間にか、エヌ氏はぐるりと周りを未来の人々に取り囲まれてしまった。
男性は、皆、身長が百八十センチ以上あり、プチマチョ系の、俳優やモデルの様なイケメンだった。
女性も、皆、身長が百七十センチ以上あり、スラリとした、女優やアイドルの様な美人であった。

（あぁ〜ぁ、何という所に来てしまったのだろう。こんな所では、俺みたいなブ男は、ますますモテないよ）

美男・美女に囲まれて、エヌ氏はがっくりと落ち込んでしまった。
しかし、エヌ氏は気を取り直し、自分が過去からタイムマシンでやって来て、自力では帰れない事を彼らに話した。
未来の人達はとても親切だった。
戻れないのなら、ここに住めばいい、とエヌ氏に言った。

どうやら目の前の巨大なビルは、一つの都市の機能を果たしているようだった。
この世界では、電気や食料等は、全て機械が用意してくれて、人

間は働く必要がないらしい。
一人の女性が、エヌ氏をビルの中へと案内し、広々とした清潔で快適な部屋をあてがってくれた。
エヌ氏は、案内してくれた女性をまじまじと眺めた。

（いい女だなぁ。リアちゃんにそっくりだ）

エヌ氏は、自分が来た時代で大人気だったグラビアアイドルを思い浮かべた。

「親切にしてくれて、どうもありがとう」とエヌ氏は彼女にお礼を言った。
「それじゃ、セックスをしましょうか」とその女性がエヌ氏に答えた。

「はぁ？」エヌ氏が女性の発言を頭の中で咀嚼して理解するのに、しばらく時間がかかった。
その間に、女性は服を脱ぎ出していた。
未来の服は薄い布一枚で出来ていて、かなりの伸縮性をもっているようだった。
首の所を、ぐぃと引っ張ると大きく伸びて、そのまま下に降ろして脱いでしまった。
下着はつけておらず、スッポンポンの全裸だった。

（お、俺は、エッチをするのか？　こ、この美女と……）

エヌ氏はようやく、これから何をするのかを理解して、女性の体を舐めるかのように見回した。
それは、まさにパーフェクトボディだった。
形の良い大きな胸の膨らみ。小ぶりの乳首は綺麗なピンク色だ。

ウエストは、不自然な程にくびれている。
プリッとしたお尻は、大き過ぎず、小さ過ぎず、まさに最高のバランスを保っている。
栗毛色のあそこの毛は、綺麗に処理されていた。

女性は、エヌ氏の手を取ると、ベッドへと導いた。
そして、エヌ氏のズボンを不慣れな手つきで脱がし、分身を取り出すと口に咥えた。

エヌ氏が風俗嬢以外とエッチするのは、これが初めてであった。
しかし、その女性のフェラテクは、どの風俗嬢よりも上手だった。
エヌ氏の分身は、あっという間にギンギンに膨張して、女性の口の中で、ハジけてしまった。
女性は、エヌ氏が発射した液体を飲み干し、更にフェラを続ける。
エヌ氏の分身は、瞬く間に復活した。

「今度は、私の中に頂戴」そう言って、彼女はお尻を突き出した。
エヌ氏は、分身の位置を彼女の秘穴に合わせ、挿し入れた。
ムギュ、ムギュ、ムギュと、女性の襞肉が、エヌ氏の分身を締め付ける。

(こ、これは、凄い、こんなのは……初めてだ)

風俗嬢の伸び切った膣穴しか経験した事のなかったエヌ氏にとって、その締まりは衝撃的だった。

(だ、駄目だぁ〜、逝ってしまう……)

あまりの締まりの良さに、二発目だというのに、エヌ氏はあっと言う間に発射してしまった。

「ご、ご免、あまりのにも気持ち良過ぎて、中で出しちゃった……大丈夫かな？」

女性は何も答えず、ニッコリと微笑むと、エヌ氏の分身をまた咥えた。

お掃除フェラか？と思ったエヌ氏であったが、ピカピカにキレイになっても、彼女は舐め続けた。

フェラが終わった時には、エヌ氏の分身は、またもやすっかりと元気になっていた。

「今度は、正常位でお願いね」彼女はそう言って、仰向けになり、股を広げた……。

「随分と時間が経ってしまった」博士は機械をセットし、タイムマシンに乗り込んだ。

エヌ氏が未来へと旅立ってから、もう十年が過ぎていた。

「待たして悪かったな。今いくぞい」そう言って、博士は扉を閉めた。

タイムマシンの振動がおさまった。博士は扉を開けた。

そこは、公園だった。

子供達が大勢寄ってきて、タイムマシンを取り囲んだ。

そりゃ珍しい物体が、突然、出現したのだ、当然の事だろう。

そう思って、博士は子供達の顔を見た。

皆、どこかで見たことがある顔をしていた。皆、不細工だった。

「博士、どうもお久しぶりです」聞き慣れた声がした。エヌ氏だった。
「随分と待たしてしまって、悪かったのう」
「いえいえ、来て頂けて、本当に嬉しいです」
「それで、どうだね？　この世界の住み心地は？」
「はい、それが……」

エヌ氏は、博士にこの世界について語り始めた。

ここは、エヌ氏が暮らしていた現代の二百年後の世界であった。
イケメン、美人を好んで交配を繰り返した人類は、やがて美男・美女だけの世界となっていた。
不老薬も開発され、人は皆、二十歳より年を取らなくなった。
しかし、その副作用で、人類の繁殖能力は著しく衰えてしまっていた。
そこに、エヌ氏が過去からやって来たのだった。

美男・美女しかいない世界で、チビでデブで不細工なエヌ氏は、超モテモテだった。
次から次に、美女達が、エヌ氏とのセックスを求めて、声をかけて来たのであった。
この世界では、結婚とか恋人といった、パートナーを限定する考えは存在していなかった。
お互いが合意すれば、誰とでもセックスして良かったのだ。

「画一化された中では、ユニークである事が、一番モテるのです」
嬉しそうにエヌ氏は語った。
「ここにいる子供達は、もしかして……」
「はい、全員、私の子供です。正確には、私の種で出来た子供達で

す」

この世界では、親子という概念はなく、産まれた子供は社会全体で育てていた。

繁殖能力が衰えた未来の男性達に比して、エヌ氏の繁殖力はとても逞しかったのだ。

「私が来てから、この都市の人口増加率が大幅に増えましてね」エヌ氏は自慢げに言った。

「君を連れて帰ろうと思ったが、随分とこちらの生活を楽しんでおるようじゃのう。君はこのまま、こちらに残るかね？」と博士は尋ねた。

すると、エヌ氏はブンブンと首を横に振って答えた。

「いえいえ博士、ぜひ連れて帰って下さい。私はもう美人とエッチするのは飽きました。ブスとエッチをしたいのです」

2　スペース☆ハーレム（前書き）

人類初の恒星間有人飛行、船中では黒人・白人・日本人の３人の美女達とのハーレム生活が……

（ＳＦ）

2　スペース☆ハーレム

銀色のロケットは、ケンタウリ座のアルファ星に向って、ひたすら飛び続けていた。
これは、人類初の恒星間有人飛行である。
地球との距離は約４．３光年。片道だけで四年以上かかる航海である。

そして俺は、この船の船長だ。
そんな長い時間、さも退屈だろうって？
とんでもない！
この船には、俺以外に、美女が三名も乗っているのだから……。

この計画が決定された時、四名の定員をどう割り振るか、優秀な心理学者達が検討したのであった。
男２：女２では、ペアになって男女間での喧嘩になりやすい。
男３：女１では、男同士で女性の取り合いになってしまう。
心理学者達の分析の結果、男１：女３が、もっとも良い組み合わせである、という結論に達したのだ。
勿論、男４：女０とか、男０：女４という組み合わせも可能だが、長い旅路である、当然、性欲処理も重要だとの判断で、当初から検討対象から外されていたのだ。
つまり、この航海では、乗員間のセックスは、出発当初から想定の範疇なのである。

さて、それではこの船に乗っている素敵な女性達を紹介しよう。
まずは、ジェニー。彼女はジャマイカ出身の黒人美女だ。
彼女は地球を代表する優秀な鉱物学者である。

そして、百メートル走でオリンピック代表候補にもなった程のスポーツウーマンでもある。
黒豹のような引き締まった筋肉質のボディと、豪快で明るい性格の熱血キャラである。

二人目は、イングリッド。スウェーデン出身の金髪美人である。
彼女は、三十カ国語以上の言葉を母国語並みにペラペラと話せる天才的な言語学者である。
輝く様なプラチナブロンドの髪と、Ｉカップの超巨乳を持った、クールな知的美女だ。

そして三人目は、日本人のアキコである。
彼女は、世界的に有名な生物学者だ。
艶やかな漆黒のストレートロングヘアー。
色白でＢカップのスリムなボディ。
さらに、献身的に男性に尽くす、控えめな性格。
彼女は、俺にとって、まさに東洋の神秘であった。

宇宙船の中では、殆どの操縦が自動化されており、乗員は全くといっていい程、やる事がない。
なので、俺の毎日の日課は、この三人とエッチをする事だった。

「アァ～ァン、いいワァ～ァ、凄ィィワァ、奥にガンガン届いてルゥ～ゥ」
ジェニーのしなやかな筋肉が俺の上で躍動している。
褐色の形の良い丸いお尻をこちらに向けて、腰を上下に振っている。
ピンクの肛門が、ヒクヒクを蠢いているのが見えている。

肉がぶつかり合う乾いた音が、狭いロケットの中で反響していた。
それにしても、彼女の膣筋の力は、半端じゃなかった。
スポーツで鍛え上げられた体は、あそこの中まで鍛え上げていかのようだった。
ギュウ、ギュウと、万力のような力で、俺の分身を締め上げてくる。

「で、出ちまうよ……」

ジェニーのあそこにかかれば、百戦錬磨の俺でさえ、イチコロである。
俺はジェニーの中に、あっという間に放出してしまった。
そして、俺の分身が引き抜かれると同時に、今度はイングリッドが、その巨大な胸で俺の顔を包み込む。

「く、苦しいよぉ～、イングリッド」

巨大な肉塊が口と鼻を塞ぎ、俺は呼吸が出来なくなる。
彼女の胸は、立派な凶器だ。快楽の兵器だ。
すると、俺は下半身に、別の快感を感じた。
アキコが、俺の分身にお掃除フェラをしてくれている。
掃除機のようなバキュームフェラで、俺の精液とジェニーの愛液でドロドロになった肉棒をキレイに舐め上げてくれた。

「船長、お掃除、終わりました」とアキコ。
「それじゃ、次は私の番ね」
イングリッドはそう言うと、俺の分身の上に腰を沈めた。
ズボズボと彼女の中に、肉棒が飲み込まれていく。

柔らかい肉の壁が、四方八方から俺の分身を優しく包み込む。これぞまさに、肉御殿である。

しばしの挿入感を味わった後、イングリッドが激しく腰を動かし始めた。

腰の動きに合わして、巨大な胸が、ブォン、ブォンと上下左右に揺れ動いている。

「オウゥ、オゥウゥ～ゥ、アゥ、アゥウゥ～ゥ」

普段は知的でクールなイングリッドだが、ベッドの中では野獣と化す。

淫穴の中がグチャ、グチャになって、淫汁がダラダラと垂れ出して来ている。

グチョ、グチャ、グチョ、グチャ……。

濡れた淫靡のメロディが、熱気のこもったロケットの中でこだましている。

先ほど、ジェニーの中に発射したにも拘わらず、俺の白濁砲はまたもや発射準備完了である。

「イングリッド、俺、もう逝きそうだよ」
「オウゥ～、私もカミング～よぉ、一緒に逝きましょぉ～ぉ」

イングリッドはフィニッシュへと向け、更に激しく腰を振リ出す。

俺も下から彼女を、ズンズンと突き上げた。

「オウゥウゥ、イクゥ、イクゥ～ゥ」
「俺も、逝くよぉ～」

俺はイングリッドの中に、ドクドクと大量の精液を放出した。
彼女もぐったりとなって、俺の上に倒れ込んできた。
俺は彼女を抱きしめ、そっと耳元で囁いた。

「最高だったよ、イングリッド」

彼女は、何も言わず、口の端を少し曲げると、笑みを浮かべて立ち上がった。
すると俺は、またもや下半身に快感を感じた。
アキコがまた、俺の分身をお掃除フェラしてくれていた。

「アキコ、次は君の番だね」
「船長、あまり無理なさらないで下さいね。私なら我慢しますので……」
「いや、無理なんかしてないさ。俺は、君とエッチをしたいのだよ」
「船長、私……とっても嬉しいです」

アキコはそう言うと、俺に抱きついて来た。
ジェニーとは、スポーツ的なセックス。
イングリッドとは、野性的なセックス。
そしてアキコとは、まったりとした家庭的なセックスを楽しめた。
抱き合いながら、キッスをして、お互いの体を愛撫し合った。
ゆっくりと時間をかけて、お互いの気持ちを昂ぶらせていく。
俺が指をアキコの性器に這わすと、ビクンと、彼女の体が反応した。
アキコは、とっても敏感な体をしていた。
彼女の淫裂に沿って、指先を上下させた。
「はぁ、はぁ」と肩で荒い息をし出した。目もとろ〜んと潤んで来

ている。
「せ、船長、お、お願い……」アキコがおねだりしてくる。それが、とっても可愛らしい。

俺は分身を、アキコの蜜穴の中に挿し入れた。
ここは、とっても気持ちがいい。ピチピチに締め付けられる。
アキコは膣穴自体が小さいので、俺を受け入れるのがやっとなのだ。
ワンサイズ小さめの穴に、無理矢理、突っ込んでいるような感じだった。

「あぁ～ぁ。あぅ、うっ、うっっ」

アキコがその可愛らしい顔を、歪めている。

「大丈夫か？　痛くないか？」
「は、はい、大丈夫です、船長。段々と慣れて来ていますから……」
俺はゆっくりと腰を振って、アキコの中をじっくりと味わった。
そして、しばらく抽送を繰り返して、本日三度目の放出をした。

ＮＡＳＡの恒星間有人飛行司令本部。

「飛行は順調か？」長官が技術者に質問した
「はい、全て予定通り順調であります」
「まぁ、長い旅だからな」

ケンタウリ座のアルファ星までは、本当に長い旅である。

そして、狭い船内に積めることが出来る物資の量は限られていた。
そこで物資を有効活用する為、尿や大便などの排泄物も全て有効に循環利用されている。
その中でもザーメンは、高タンパク物質として、とっても貴重な栄養源であった。

「プログラムは予定通り稼動しているのか？」
「はい、毎日三度のザーメン採集は問題なく成功しております」
「長い旅だ……彼にはこのまま目的地まで、ずっと眠っていて貰わないとな」

今日もプログラムされた妄想を見ながら、船長は一日三度の夢精を繰り返すのであった。

3　密室の五人（前書き）

密室に閉じ込められた五人の男女、果たして彼らの関係は……

（サスペンス）

3　密室の五人

俺は、いったい何でこんな部屋にいるのだ。
気がついたら、この部屋に閉じ込められていた。
ここは部屋というよりも、巨大な業務用エレベータの中のようだった。
四方と上下、全て冷たい金属製の壁、天井、そして床だ。
壁の一面には、エレベータの様な扉があるが、固く閉じられている。
だが、エレベータにある筈のボタンや非常電話の類は、一切無かった。
天井に埋め込まれた電灯が、この中を照らしていた。

俺は記憶が定かでない。断片的にしか、ものを思い出せないのだ。
しかし、はっきりと憶えているのは、俺が銀行強盗をした、という事だ。
警官を襲って、拳銃を奪って、銀行に押し入った。
強盗は成功したのだが、間違って女子行員を撃ってしまった。
そして、警官隊に追われたのだが、俺は逃げ切った筈だった。
その証拠に、俺の手には、ずっしりと重たいボストンバッグが握られている。
こいつらの目の前で、この中身の確認をする事は出来ない。だが、この中には間違いなく大金がある筈だ。
こいつら、そう、この部屋の中には、俺以外に、四名の人間がいる。

男性が二人に、女性が二人だ。

ひとりは、でっぷりと太ったスーツ姿の中年男性だ。ギトギトに脂ぎった顔をしたキモイ親父である。

もうひとりの男は、若い男だ。ラッパー風のいでたちで、ニヤニヤ薄ら笑いを浮かべた不気味な奴だ。目が逝っている。こいつはかなりヤバそうだ。

女のひとりは、いかにもお水系の若い派手な顔立ちの美人だ。スタイルはスリムだが、出るとこはしっかりと出ている。服装はキャミと超ミニである。さっきから、何度かパンティが見えている、ピンクだった。

そして、最後のひとりはＯＬ風の中年女性だ。やや肉付きがよい、地味な感じの女性だ。でも、俺の見た所、眼鏡を外した素顔は、なかなかの美人だ。着ているものは、どこかの制服のようである。

「どうやら、私達はこの中に閉じ込められてしまったようですね」と中年男性。

「なんか、ちょームカつく、なんであたしが、こんな中に閉じ込められなくちゃなんないのよ」

「まぁまぁ、そう短気にならないで、その内に助けが来ますよ」

「うるさいわね。ほっといてよ。キモデブ！」

「こいつは〜、威勢のいいネーちゃんじゃん。げへへへぇ。それに、いい女だ。せっかくの機会を無駄にする手はないよな。ぐへへへぇ〜」

「な、何よ、あんた！　あたしに手を出したら、ただじゃおかないからね」

「げへへへぇ〜。なら、試してみっか？　おいっ！」

若い男は言葉をはき捨て、ズボンを脱ぎだした。

巨大なイチモツが、天井を向いて、そそり立っている。

「ちょ、ちょっと、あんた、冗談はやめなさいよ。あんた達も見てないで、助けなさいよ」

若い女は、明らかにうろたえている。
密室の中で、三人の男性に囲まれ、その中の一人はイチモツを隆起させているのだ、無理もない。
だが何故か、この女を助けてやろうという気は全くおきなかった。
いや、むしろ、いい気味だと思えてきた。

「レイプですか、いいですねぇ～。私も混じってもいいですか？」
「いいぜ。それじゃ、お前は手を押さえろ。お前のネクタイで、手を結んじゃいな」

男達二人は、抵抗する若い女を、無理矢理、床に押し倒した。
中年男は、若い男の指示通り、ネクタイで女の手を結んだ。

「こんな物、邪魔だな」

若い男はそう言うと、引き千切るように、キャミとスカートを剥ぎ取った。
若い女は、ピンクの下着姿になった。

「ぐひひひぃ～。いい体してんじゃねぇ～かよ」

若い男は、女の顔から体を、ベロベロと舐め回した。

「き、気持ち悪いわね～。た、助けてよ、あんた。ぼけっと眺めてないで、あたしを助けなさいよ～」

若い女は、俺の方を見て、助けを求めてきた。
だが俺は、女の顔を見て、薄ら笑いを浮かべてやった。
それを見た女は、ついに諦めたようだった。

「ふん、いいよ、やりたきゃ、やりなよ！　好きにしなよ！」

若い女は、そう言うと、大きく股を広げた。

「ちっ、面白くねぇ〜なぁ〜。もっと抵抗しろよ、この糞ビッチ！」

若い男は、女の頬にビンタを喰らわした。

「い、痛いわねぇ！　この糞野郎！」
「へへへぇ。いいねぇ、その顔。燃えるよ、げへへへぇ〜」
「くそぉ〜、変態、キチガイ、バカヤロ〜！」
「ぐへへへぇ、最高だぜ。そろそろ、ぶち込んでやるよ」

若い男は、女のパンティを剥いで、分身を力任せに女のマンコに挿し入れた。

「ぎゃぁ〜っ！　い、痛いだろぉ〜がぁ、この糞野郎がぁ！」
「げへへへぇ、いいぞぉ、もっと苦痛で顔を歪めろよ！　この売女！」

若い男は、ガンガンと激しく腰を打ちつけ続けている。
女は苦痛に顔を歪めて、必死に堪えていた。

「ほらぁ〜、もっときつく締めろよぉ〜、このガバまん！」

男はそう言うと、女の首を締め上げ始めた。

「なんかこうするの、初めてじゃないような気がするなぁ～、げへへへぇ～」

女の顔がみるみる内に赤くなり、やがて紫色に染まってくる。

（やばいぞ。これ以上やると本当に死んでしまう）

「やめておけ、やり過ぎだ」

俺は、男の手を女の首から外した。

「邪魔すんじぇね。この野郎ぉ～」と、ギラギラの目が俺を見上げた。

（こいつ、本当にヤバイ奴だ。まさに狂犬だな）

「けっ、邪魔が入って白けた」

そう言って、男は女のマンコからペニスを引き抜いた。

「あとは、好きにしていいぜ」

それを聞いた中年男が、ズボンを脱いで、ゲホゲホと咳き込んでいる若い女の上に体を重ねた。

若い男が俺のことを、じろりと睨んだ。

（ふん、来るなら来い）

俺は、上着のポケットの中にある、ずっしりとした冷たい感触を確かめた。
まだ、弾は残っている筈だった。
だが、若い男は俺を無視して、今度は中年女の方を向いた。
「おい、おばちゃん、あんた、結構、いい女じゃゃん。やらせろよ」
若い男はそう言うと、いきなり中年女性を押し倒して、服を引き裂いた。
服の下からは、白い肌と豊満な肉体が現れた。

「エロい体してんじゃゃんか、げへへへぇ」
「いや、やめて、やめて下さい」
「誰も止める奴なんかいないよ！　なぁ？」

若い男はそう言って、俺の方を見た。
中年女性は涙を流しながら、無駄な抵抗をしていた。
若い男は片手で中年女性の両手を押えて、もう片方の手を、パンティの中に滑り込ませた。

「へっ。この中はもう濡れ濡れじゃねぇかよ。おばさんも、若い男にやって貰いたいんだろ？」
「違うわ。やめて、お願いだから。あなたも、こんな中に閉じ込められて、きっと気が動転してるだけなのよ」
「ば〜か、俺はな、普段からレイプが大好きなの。女を犯るのは、

俺の生きがいなんだよ」
「そ、そんな……」
「だから黙って、俺に犯られてな！」
「お願い、やめて」
「うるせいよ！」

男は、女性の顔を平手で殴りつけた。

「ひぃ〜ぃ。やめて、おねがいだから……」

中年女性は、泣き叫んでいる。
ふと横を見ると、中年男性が若い女の中に挿入して、懸命に腰を振っていた。
若い男は、中年女性のパンティを剥ぎ取った。
毛深い陰毛と大きめのビラ肉が、姿を現した。

中年女性の泣き顔を見ていると、俺は何故か、この女を助けたくなった。
何か罪悪感を感じたのだ。
俺はポケットから拳銃を取り出して、若い男に向けた。

「おい、もうその辺りでやめておけ」
「てめぇ〜、何だそりゃ、おもちゃか？」
「残念だな。これは本物だよ。警官から奪ったのさ。俺は銀行を襲って来たのだ」

若い男の動きが止まった。
拳銃の威力の前では、いくら無鉄砲な若僧といえども、黙らざるおえないのだろう。
だが、予期していなかった事が起こった。

中年女性が、急にパニックを起こし始めたのだ。

「た、助けて！　う、撃たないで！　や、止めて。助けて。止めて、助けて、止めて……」
「おい、俺はあんたを撃つ気はないよ」
「う、嘘よ。あ、あなたは、私を撃ったのよ。思い出したわ。私は、あなたに撃ち殺されたのよ」

そうだ、思い出した。この女性は、俺が撃った女子行員だった。

「殺されたって？　ざけるなよ。お前は、こうして生きてるじゃんかよ。げへへへぇ～」
「それは違うわ！　あたしも思い出したわ！　あたしは、あんたに殺されたのよ！」

中年男に犯されていた筈の若い女性が、いつの間にか立ち上がって、若い男を指さしていた。

「あんたにレイプされながら、首を絞められて殺されたのよ」
「げへへへぇ～。そう言えば、そんな事もあったな、ぐひひひ……」

バカ笑いをしていた若い男の顔が、急に真剣な表情に変わった。

「俺は車にひき殺されたんだ。あいつをレイプした後、道を歩いていたら、突然……」
「あっ、それ多分、私です」と中年男性。
「車の運転中、急に心臓発作を起こしまして、あなたを轢いてしまったのを思い出しました」
「ふん、いい気味だわ。ざま～みろ。あたいを殺した罰よ」
「てめぇ～、よくも俺を轢き殺しやがったな！」

若い男は、中年男性に殴りかかろうとした。

「あ、あれは、急な病気で……じ、事故だったのですよ」
「病気じゃないわよ」と中年女性が言った。
「へぇっ？」
「私が、毒を盛ったのよ。あなたは、ずっと私を恐喝して来たのよ」
「あ、そうでした。思い出しました。貴女は、１０年前、ご主人を殺したのです」
「あいつは酒乱で、いつも酔っては、私に暴力を振るっていたのよ」
「それで、ご主人を殺したのですね」
「そう、それをあなたに見られてしまって……私は銀行のお金を横領して、あなたに渡していたのよ」
「そ、それで、私に毒を……」
「も、もう、限界だったのよ。横領がバレそうで……」
「ち、ちくしょう。よ、よくも、私を殺しましたね。まだまだ、やりたい事がいっぱいあったのに」
「あたしだってそうだよ。まだ若くて、こんなに綺麗なのに、こいつに殺された！」
「俺だって、まだまだレイプしたかったぞ」
「わ、私は、あなたに撃ち殺されて、楽になれたのかもしれないわ……」
「げへへへぇ。それで、お前はどうしてここにいるんだ？」

俺も、思い出した。
俺は金に困っていたのだ。そして、その原因があの若い女だった。
「俺は、お前にずっと貢いで来た。かなりの金をつぎ込んだのに……」
「あっ、思い出したわ。あんた、確か、お店の常連だったわよね」

「ふん、お前にとっては、俺はその程度の存在か。俺には、お前が全てだったのに……」
「私のファンは、大勢いるのよ」
「そりゃ、大勢いた、の間違いだろ。ぐひひひぃ〜」
「そして俺は金に困って銀行強盗に入って、あなたを撃ち殺して、俺も警官隊に射殺されたんだよ」
「って事は、俺達、みんな、死人って事か？　げへへへぇ〜」
「そうみたいだな」
「私達は、いったいどこに行くのでしょうか？」
「悪人の行く先は、決まってるだろう」

「ガタン」と部屋が振動した。
どうやら、この部屋は、ずっと下に向って移動していたらしい。
そして、目的地に到着したみたいである……。

ゆっくりと、扉が開いた。

4　還暦の童貞男（前書き）

定年を向かえた童貞男性が一人の少女と出逢って初体験を……

4　還暦の童貞男

「どうも長い間、ご苦労様でしたぁ～」若い女子社員が、笑顔で私に大きな花束を渡してくれた。

今日は、私の誕生日。六十歳の誕生日である。長年、勤めて来たこの会社とも、今日でお別れだった。
そう、私は、定年を迎えたのだ。
会社の正面玄関で手を振る職場の同僚達に見送られて、名残惜しくも、私は会社を後にした。

私の会社生活で特筆すべきものは、何もなかった。ただコツコツと仕事をするだけの毎日であった。特に出世をした訳でもない。可も無く不可も無く、只々平凡なサラリーマン人生であった。
そして家に帰っても、定年退職を祝ってくれる家族はいなかった。
私は一度も結婚した事がないのだ。ずっと独身であった。いや、独身どころか、六十歳にもなって、まだ童貞なのだった。

別に女性に興味がない訳ではなかった。

ただ元来の内気な性格の上、女性と出会うようなきっかけがなかったのである。それに風俗にも行く気にもならなかった。
若い頃は、たまにオナニーをした事もあったが、この十数年は、まったくその気さえ起きなかった。そして気がついたら、いつの間にかこの歳になっていた。
私は、酒も付き合いでたしなむ程度、煙草も吸わず、ギャンブルもしない。趣味と言えば、図書館で借りた本を読むくらいだった。
なので、コツコツと貯えて来た貯金は、それなりの額になっていた。

その貯金と退職金があれば、贅沢さえしなければ、残りの人生をのんびりと暮らしていくことは出来そうである。

私は花束をかかえたまま、公園のベンチに腰掛け、これからの残りの人生、何をしようかと、ぼんやり考えていた。

「おじさん、綺麗な花束だね」

突然、声がした。私が振り向くと、そこには若い女の子が立っていた。

「隣、座ってもいいですか？」
「あ、は、はい、どうぞ」

こんなに若い女性と話すのは、本当に久しぶりだった。ぷ～んと甘い、いい匂いがした。

「おじさん、ここで何してるの？」
「見ての通り、何もしてないよ。何をしようかと考えていたのさ」
「ふ～ん、暇なんだ」
「そうだね。暇だね」
「花束どうしたの？」
「貰ったんだよ。定年退職の記念にとね」
「へぇ～ぇ、綺麗だね」
「欲しければ、君にあげるよ。私が持っていても、仕方がないからね」
「うわぁ～ぁ、ありがとう」

女の子は、屈託の無い笑みを浮かべて、花束を受け取った。
可愛い娘だな。年齢は十五～十七歳くらいだろうか？　女子高生

かな？　平日だが、制服は着ていなかった。

「それじゃ、私は、これで」

私はアパートに戻ろうとして、立ち上がった。

「ねぇ、おじさん。お願いがあるんだけど……」
「えっ、なんだい？」
「今夜、私を、おじさんの家に泊めてくんないかな？　行くところがないの……」
「そ、それは、無理だよ。君、親御さんは？　家出して来たの？」
「お、親はいないの……親戚の家にいたんだけど、辛くされて……」
「し、しかし。い、いきなり、見ず知らずの女の子を……」
「ねぇ、お願い。わ、わ、私、もう……」

女の子は、泣き出してしまった。
私はどうすれば良いか判らなかったが、元来、気の弱い性格である、彼女の押しに負けてしまった。

「そ、それじゃ、い、一泊だけだよ」
「うん。ありがとう、おじさん」
「君の名前は？」
「#有紀｜ゆうき｜#だよ」
「有紀ちゃんか。私は山岡です。よろしく」

私は手を差し出し、彼女と握手した。小さくて柔らかい、とっても可愛いらしい手だった。

私達はアパートに向った。彼女は、私の後ろを、大きな花束を抱えて、ついて来た。

公園から１０分程で、私のアパートに着いた。
築３０年以上のオンボロアパートだが、私にとっては、住み心地の良い場所だった。

扉を開けて、部屋の中に入った。
部屋は、私の几帳面な性格を反映して、殺風景ながら、いつも綺麗に片付いている。

「お邪魔しま～す」
「どうぞ、むさ苦しい所だけど」
「あれ、おじさん、家族はいないの？」
「う、うん」
「もしかして、単身赴任ってやつ？」
「いや、独身なんだよ」
「あっ、判ったぁ～。熟年離婚だぁ」
「それも違うよ。ずっと独身なんだよ。一度も結婚した事はないよ」
「へぇ～、そうなんだ。なんか寂しいね、それって」
「う、うん」

私は腕によりをかけて、彼女に夕食を作ってあげた。
長い独身生活のおかげで、料理の腕はそこそこに上達していた。

「うわぁ～、すっごい美味しいよ。こんな美味しいもの食べるの、本当に久しぶりだぁ」

彼女はニコニコしながら、私の手料理をパクパクと食べてくれた。いつも、ひとりで作って独りで食べる寂しい食卓だったので、それがとっても嬉しかった。
食事が終わって、彼女はお風呂に入った。
私はジャージを貸してあげた。かなりブカブカだったが、それが

またとっても可愛らしかった。
交代で私がお風呂に入っている間、彼女はテレビを見て、げらげらと笑いころげていた。
私は湯船に浸かって、若い女性が入った後の残り香を味わっていた。縮れた毛が一本、プカプカと水面に浮かんでいた。これは、あそこの……。
大昔に過ぎ去ったはずの春が、私の中で少しだけ目覚め始めていた。

「有紀ちゃんの親戚の人、心配してないかな？　ちゃんと連絡だけでもしておけば？」
「いいのよ。もうあそこには、絶対に戻りたくないの……私、山岡さんと一緒に住もうかな？」
「だ、駄目だよ。一晩だけって約束だろう……」
「うふふふ、冗談だってば。でも、山岡さんって、お父さんみたいで、有紀、ちょっと嬉しいなぁ～」
「えっ、私がかい？」
「そうだよ。ちょっと寄り添ってもいい？」

彼女はそう言うと、私の肩に頭をつけて、寄りかかってきた。シャンプーのいい匂いがした。

「うふ、パパみたい」
「そ、そうかな～」
「ねぇ、おじさんの事、パパって呼んでもいい？」
「パ、パパかい？　て、照れくさいけど、いいよ」
私は、家族が出来たみたいで、とても嬉しかった。人とこんなに身近に触れ合ったのは、いったいいつ以来であろうか？　人肌の温かさが、とても心地良かった。

と、突然。下半身に違和感を感じた。彼女が、寝巻きの上から、私のペニスを擦っていた。

「な、何をするんだい。だ、駄目だよ、そんな所を触っちゃ……」
「パパとエッチしたいなぁ〜」
「な、何を言ってるんだい。君と私では、いったい何才年が違うと……」
「年なんか関係ないよ。だって、パパの事、好きになっちゃたんだもの」
「そ、そんな。君は、まだ未成年だし……」
「私はとっくに処女じゃないし。男性だって、もう大勢経験してるよ。だから、気にしないで」
「い、いや。で、でも、わ、私は、実は、は、は、初めてなんだよ……」
「えっ？　初めてって？　何が？」
「だ、だから、エッチするのが……」
「えっ？　う、うそぉ〜。だってパパ、六十歳なんでしょ？」
「う、うん、ずっとエッチする機会がなかったのだよ」
「そっかぁ〜。それじゃ、私が、パパの初めての女性になってあげるね」

そう言うと、彼女は寝巻きの中から、私のペニスを取り出して、おもむろに口に咥えた。
チロチロと舌先で鈴口を刺激される。そして、カリの周りから、裏筋、玉袋をペロペロと舐め廻された。萎びていた肉茎は、徐々にだが、かつての固さを取り戻していった。

「あっ、だ、駄目だよぉ、有紀ちゃん、そ、そんな事しちゃ〜」
「うふふふ、でもパパのおちんちん、元気になって来たよぉ〜。ムスコさんは、正直ですねぇ〜」

彼女は、右手で竿をしごきながら、亀頭を咥え、頭を上下に動かした。
気持ちいい。とっても気持ちがよかった。こ、これが、フェラチオなのか……。
「ほら、こんなに大きくなったよ。こんなデカチンなのに、エッチした事がないなんて、もったいないないなぁ」
我が分身を見ると、隆々とそびえ立っていた。こんな姿を見るのは、本当に何十年ぶりであろうか……。
彼女が顔を近づけて来て、私は口づけを交わした。生まれて初めてのキスだった。
小さな舌が、私の口の中へと入って来た。そして、その舌は、口腔内をあちこちと彷徨った。
な、なんと気持ちがいいのだ。こ、これが、キスなのか……。
「うふ、パパのキッス、とっても気持ちいいよ。私も濡れちゃったぁ。ほらぁ〜」
彼女はそう言うと、私の手を掴み、彼女の股間へと導いた。そこには、フサフサした陰毛と、ヌルヌルした陰部があった。
「く、クリトリスを弄って。ほら、ここだよぉ〜」
私の指先は、彼女の陰部のコリコリした箇所を探りあてた。そこを指先でいじる。
「あぁ〜ぁん、パパ上手だよぉ。とっても気持ちいいよぉ」

私の指は、更にその下にある、ヌルヌルの穴の中へと吸い込まれていった。
「はぁ〜ぁん、いぃぃ、感じちゃぅぅう、いいわぁ〜」
私の指は、その穴の中で、ギュウギュウと締め付けられた。す、凄い、あそこの中は、こんなに締まるものなのだ。
「それじゃ、パパは初めてなので、私が上になってあげるね。仰向けに横になってぇ〜」
私は布団の上で横になった。彼女が、私の上にまたがってきた。そして、ゆっくりと腰を落とした。
私の隆起した分身は、にゅるりと彼女の中に飲み込まれていった。こ、これが、女性の膣の中の感触なんだ。まさに感激だった。六十年間生きてきた中で、最も感激した瞬間であった。
彼女は、私の上で腰を前後に振り始めた。彼女の中で、私のペニスが擦れて、とっても気持ちが良かった。
これがセックスなんだ。セックスとは、こんなにも気持ちがいいものだったのか……。
私は、六十年間もの間、童貞でいた事を今更ながら、後悔した。そして、長年の間、閉じ込められ続けて来た精子達が、ついに開放の時を求めて騒ぎ出しているのを感じた。
「で、出るよ。射精しそうだよ」
「いいわぁ、出して。中に出してもいいわよ。今日は安全日だから」
「で、でも……」
「いいから出して。きてぇ〜。パパのが欲しいのぉ〜。おねがぁ〜いぃ」
「うぅ、おぉ、うぅぅ。で、でる、でるよぉ〜ぉ！」

私は、生まれて初めて、セックスで射精した。女性の中に、精を放出したのだ。
気持ちがいぃぃ……。なんて気持ちがいいのだろう。こ、これが、セックスなんだ……。
「パパぁ～、すっごく気持ち良かったよぉ～。パパ、本当に初めてなのぉ？」
「うん。正真正銘、これが初めてのセックスだよ。有紀ちゃん、ありがとうね。感激だよ」
「パパぁ、ありがとうね。有紀も、とっても気持ち良かったよ」

結局、セックスの快楽に目覚めてしまった私は、年甲斐も無く、明け方迄、何度も彼女の若い肉体を貪ってしまった。そして、快楽の心地良さに疲れ果て、深い眠りについたのだった。

翌日、私の目が覚めた時には、太陽はとっくに高く昇っていた。ふと思い出して、慌てて部屋の中を見回したが、少女の姿はどこにもなかった。
テーブルの上に寂しく放置された花束が、しおれかかっていた。たった一夜の付き合いであったが、彼女がいなくなってしまったことを実感すると、とてつもない喪失感に襲われた。
花束の横に一枚のメモが置いてあるのに気がついた。メモを手に取り、読んでみた。
『パパ、どうもありがとう。たとえ何があっても、人生、前向きにね。本当にゴメンなさい』

えっ、ゴメンなさい？

そして、タンスの引き出しが開いているのに気がついて、中を見た。

タンスの奥にしまっておいた、貯金通帳と印鑑、全てが無くなっていた。

三十八年間、コツコツと貯めた私の全財産が消えていた。

さてと私は、これからやることが出来た……また働かなくては。

5　パンティーになった僕（前書き）

朝起きたらパンティーになっていた僕は、大好きな女の子に穿かれて……

5　パンティーになった僕

朝起きたら、僕はパンティーになっていた。
それも、大好きな後輩、＃美佳――みか――＃ちゃんのである。
それは、美佳ちゃんが両手で僕を持ち上げて「今日はこれにしよう」と微笑んだからである。
何故判ったって？
パンティーなのに、不思議と五感はあるようだ。
するすると美佳ちゃんの長い脚を引き上げられ、目の前には、夢にまで見た美佳ちゃんのあそこが……。
黒い茂みが近づいて来て、僕はぴったりと美佳ちゃんの下半身を包み込んだ。
美佳ちゃんのスベスベの肌の温もりを感じる。ボディ・ローションのいい匂いがしている。
フサフサの下草の周りの処理された部分が、少し伸びて来ていて、チクチクする。
秘裂から飛び出している柔らかい肉唇が、直接、僕に触れていた。
今、憧れの美佳ちゃんの大事な部分を、僕が独占している。
そう思うと、感激で涙が出そうだった。でも、パンティーなので、涙は出ない。
美佳ちゃんは制服を来て、家の外に出た。どうやら学校にいくようだ。
でも、どうして僕は美佳ちゃんのパンティーになったのだろう？

僕は、記憶を遡ってみた。

昨夜、僕はいつものように、オナニーをしていた。
オカズは勿論、美佳ちゃんである。

「美佳ちゃん、好きだよぉ〜。愛してるよぉ〜。あぁ〜、美佳ちゃんのパンティーになりたぁ〜い」

ちんこを擦りながら、僕は叫んで、逝った。
あの時、なにか変な声がしたような……「オマエノノゾミヲカナエテヤロウ」とかなんとか。
射精すると同時に、僕の意識は薄れていき、寝てしまった。
そして気づいたら、僕はパンティーになっていた。

今、電車の中にいる。音と振動でわかる。通勤・通学の時間帯なので、満員電車のようだ。
歩いている間に僕（パンティー）は美佳ちゃんのお尻の谷間にくい込んでおり、肛門に直に触れていた。
すると突然、僕は誰かに触られた。
な、なんだ。
見るとゴツゴツした男の手が、美佳ちゃんのお尻を覆っている僕を擦っている。
痴漢だ。

「き、気持ち悪いなぁ〜。スリスリと俺を擦るんじゃねぇ〜よ」と僕は怒鳴った。

しかし、僕の怒りの声が痴漢に届くことはなく、痴漢は美佳ちゃんのお尻を覆う僕を撫ぜ続けた。
すると美佳ちゃんの体がちょっと汗ばんできて、僕もしっとりと

濡れてきた。
そして次の駅で、客が大勢おりた。どうやら痴漢も降りたようだった。

そしたら「プスゥ～」
美佳ちゃんが、おならした。すかしっ屁だ。
初めて嗅いだ、美香ちゃんのおなら。結構、臭い。
でも、美佳ちゃんから出るモノは、僕にとっては全て芳しい匂いなのだ。

美佳ちゃんは、学校に着いたようだ。
スカートの中から見える地面に、見覚えがある。
学校に着くと同時に、美佳ちゃんはトイレに駆け込んだ。どうやら電車の中から、ずっと我慢していたようだ。
トイレの個室に入って、美佳ちゃんは僕を、膝まで引き降ろした。シャァ～～ッ。活きよい良くおしっこが出始めた、そして、ブスッ、ブスッ、ブスゥ～ゥと、うんちを出した。
憧れの美佳ちゃんの、放尿・排便シーンを、間近で見れた。超感激である。
カラン、カランとトイレットペーパーを引き千切って、おまんこと肛門を拭いた。
そして、僕を引き上げた。おしっこのアンモニア臭とうんこの芳しい匂いが少しした。う～ん、美佳ちゃんの匂いだ。

そして、授業中。
座ると、椅子と美佳ちゃんのお尻に挟まれて、密着度がさらに増す。
あぁ～ぁ、美佳ちゃん、僕はなんて幸せ物なんだ。大好きな美佳ちゃんとこんなに密着出来て……。
すると美佳ちゃん、スカートのポケットに手を入れて、僕の上か

ら、クリちゃんを擦り始めた。

えっ？　これって、美佳ちゃん、まさか？　オナニー？

どうやら、授業中にオナニーができるように、スカートのポケットの底を切ってあるみたいだ。

美佳ちゃんの指に押さえつけられて、僕は、美佳ちゃんのクリちゃんをスリスリする。

小さなクリちゃんが、段々と大きくなって頭を出し、固くなってくる。

美佳ちゃんは、周りに聞かれないように、ハァ、ハァ、と小さな声を出している。

蜜壷から、トロ〜リと生温かい淫蜜が垂れて来て、僕に染みを作った。すごい感激である。

美佳ちゃんが、授業中にオナニーするような子だったなんて、まったく知らなかった。

エロい美佳ちゃんも、いいなぁ〜。

指の動きが止まった。さすがに授業中に逝くところまではやらなかった。

僕だけが、美佳ちゃんの秘密を知ったような気がして、とっても嬉しくなった。

やがて、学校も終わって、美佳ちゃんは家に帰って来た。

家に着くと、美佳ちゃんはベッドの上に横たわり、指先で僕を撫ぜ始めた。どうやらさっきの続きをするみたいだ。

指先で押されて、僕はどんどんと美佳ちゃんの淫裂の中へとくい込んでいく。

「あぁ〜ぁん、はぁ、はぅ、あぁ〜ぁぅん」美佳ちゃんが、エッチな声を洩らしている。

美佳ちゃんの蜜壷からヌルヌルの淫汁がダラダラと溢れ出してきて、僕に大きな染みをつくった。
クリちゃんを中心に、指の動きが徐々に早くなってくる。
「あぁ、あぁ～ぁん、あぁ、あぅ、あぅ、あぅ」
そして、美佳ちゃんの手が僕の中へと入ってきて、指を淫壷の中に挿し入れた。
「あぁ～ぁん、先輩。Ｓ先輩ぃ～ぃ。今日は先輩に会えなくて、美佳、寂しかったよぉ～」
Ｓ先輩？　それって僕の事？　美佳ちゃんは、僕の事が好きだったのか？
「あぅ～～ぅん。美佳、先輩にエッチな事、いっぱいして貰いたぁ～ぃい、あぁ～ぁん」
「美佳ちゃ～ん、僕はここだよ。ここにいるよぉ～！」と、僕は思わず叫んだ。
しかし、僕のそんな声は勿論、聞こえることなく、美佳ちゃんは、二本の指で、淫壷の中をグリグリとこねくり回している。
「あぁ～ぁあ、い、逝くよぉ、Ｓ先輩ぃ～ぃ、美佳、い、逝っちゃうよぉ～～ぉ」
美佳ちゃんはそう叫ぶと、体を小刻みに痙攣させ始め、ぐったりとなってしまった。
美佳ちゃんのオナニーを、間近で見てしまった。そして美佳ちゃ

んが、僕の事を好きだったなんて！
なんという感激なんだろう！　僕と美佳ちゃんは、両想いなんだ！
僕はまさに、幸せの頂点にいた。

やがて美佳ちゃんは、フラフラとベッドから起き上がり、制服を脱ぎ出した。
そして、最後に僕を脱いだ。
美佳ちゃんは、僕を持ち上げると、顔を近づけてマジマジと僕を見つめた。

そして、言った。

「古くなったから、捨てちゃおう」

僕は、茶色い紙袋に入れられて、ゴミ箱に捨てられた。

6　コレクション（前書き）

何故か男性について来てしまった私は、彼に体の部位を次々と食べられていく……

（カニバリズム・ホラー）

※結構グロいので注意して下さい。

6　コレクション

何故、私は彼について来てしまったのだろう。
路上で声をかけられた男性について行くなんて、今まで一度もなかったのに……。
それも、私はあと一ヶ月で結婚する身だというのに……。

気がつけば、私は、彼のアパートの部屋に来ていた。
ベッドの上で横たわる私の目の前には、彼の顔があった。
彼の分身が、私の中で抽送を繰り返している。
突かれ、そして、引かれるたびに、私の全身を電流が駆け巡った。

一目見た瞬間に、私は、彼に惹かれた。
まるでハーフのような甘く端正なマスク。
モデルのようにスラっとした長身と長い手足。
引き締まった美しい筋肉が、その体を包んでいる。
そして、彼のペニスは太く長く、私の女芯の奥をグイグイと突き上げている。

「あぁぁ〜ぁ、凄いわぁ、こんな凄いのわ……初めてよぉ〜」
「君は、最高だよ。う〜ん、本当に気持ちがいい。君は、僕をとっても満たしてくれるよ」
「あぁ〜ぁ、私もよ。こ、こんな凄いの……も、もう、貴方なしでは満足できないわぁ」
「うぅ〜ん、気持ちいいよぉ。もう逝きそうだ」
「私もよ。あぁ、だ、だめ、駄目ぇ〜ぇ！　い、い、いっちゃぅ〜ぅう！」

彼が精を解き放つと共に、私はベッドの上で、ぐったりとなってしまった。

「とっても良かったよ。君は本当に素晴らしい。君の全てを、僕のものにしたい」

「えぇ、いいわ。私の全ては、貴方のものよ」

私がそう答えると、彼はニヤリと笑って「ありがとう」と言った。

そして、私の右膝から下を……切断した。

いったいどうやって切断したのか判らなかった。

不思議と痛みは全く無かった。

切り口から血が流れ出る事も無かった。

彼の手には、切断された私の右脚があった。

「とっても柔らかくて美味しそうなふくらはぎだ。今日はこれでシチューを作るよ」

彼はそう言うと、私の右脚を持って台所に行き、調理を始めた。

私はベッドの上から、調理をしている彼の後ろ姿を眺め続けた。

やがてグツグツという音と共に、部屋の中に美味しそうな匂いが立ち込め始めた。

大きな鍋の中で、私の右脚は、人参やジャガイモと一緒に煮られている。

「出来たよ。う〜ん、美味しそうだ」

彼は鍋からシチュー皿に盛りつけ、フランスパンとワインもダイニングテーブルの上に用意した。

「いただきます」そう言うと彼は、私の右脚肉を食べ始めた。
「どう？　美味しい？」と私は彼に訊ねた。
「あぁ、やっぱ肉が上質だから、とっても美味しいよ」と彼は笑顔で答えた。

彼は、足の骨についた肉を、じゃぶるようにして食べている。
私は、彼に喜んで貰えて、とても満たされた気分になった。嬉しかった。そして、体の芯が熱くなった。

食事が終わると、彼は、また私を抱いてくれた。
何度も何度も、私を抱いてくれた。私は、数え切れない程の頂天を極めた。

数日が経った。
いつの間にか、私の両手両脚は、付け根からなくなっていた。ダルマの様な体になっていた。
彼が、全て食べてくれた。
色々な調理方法で、私の肉体を料理して、食べてくれた。
彼の食欲を満たす度に、私はとてつもない満足感を得た。そして、下腹部の女の芯が、熱く燃えた。

(もっと食べて欲しい。私の事を、もっと食べて……)

彼の食欲は旺盛だった。
彼は、私の腹を切り開いて、次々と内臓を取り出し始めた。
「君の腸と胃は、煮込みにするよ。じっくりと煮込むと、本当にいい味が出るんだよ」

私の腸と胃は、コンニャク等と共に、味噌仕立てで煮込まれた。
彼は、それにネギをのせて、七味をかけて食べた。
「肝臓は、やっぱレバ刺しだよね。ゴマ油に塩を入れたのに、つけて食べると、凄く美味しいんだよ」
彼は、私の肝臓を、薄くスライスして、ペロリと平らげてしまった。
すい臓、脾臓、膀胱……全ての内臓が、彼の手によって、美味しい料理へと姿を変えていった。
そして、私のお腹の中は、空っぽになった。しかし、私の心の中は、充足感でいっぱいになった。

彼に出逢ってから、いったい、どれ位の時間が経ったのだろう……私の頭の中には、もう時間の感覚が無くなっていた。
「君のお尻の肉は、最高に柔らかくて、気持ちいいよ」
彼はそう言って、私の尻肉に手を添えて、軽々と私を持ち上げた。
「随分と、軽くなっちゃったね」
そして膣穴にペニスを挿し込むと、私の体を前後に動かして、私の中を掻き回した。
私は、あっという間に絶頂に登りつめ、イってしまう。
ぐったりとなった私の尻肉を、彼は切り取った。
「今夜はステーキだよ。ご馳走だよ」

彼は、フライパンで、私の尻肉を焼き始めた。
ガーリックと肉の焼ける香ばしい匂いが、部屋にたち込める。
「う〜ん、脂のノリといい、柔らかさといい……これは、最高の肉だよ」
彼は、私の尻肉をナイフで切り、フォークで口に運んだ。
レアに焼かれた肉からは、赤い血が滴り落ちて、彼の口端を汚した。
「とっても美味しいよ」と彼は満面の笑みを浮かべて、ナプキンで口を拭った。
それを見て、私は言いようのない満足感を感じた。そして体の芯に、とても熱い疼きを感じた。
（ありがとう。私を食べてくれて……）私は心の中で、彼に感謝した。
ステーキを食べ終えて、彼は、私のピンク色の乳首に舌を這わせた。
乳首がつんと上を向いたお椀型のＥカップバストは、私の自慢だった。
彼は、そのバストを切り取った。
「口の中でとろけていくよ。素晴らしい」
彼は、スプーンで、乳房の黄色い脂肪球をすくっては、口へと運んだ。
「脂肪の程よい甘さが、なんとも言えない旨さだ。これはまさに最

高のデザートだよ」

脂肪球を食べ終わった彼は、乳首を噛み千切って食べた。

「乳首の、このグミの様な食感が堪らないな」

こうして私の自慢の乳房は、彼のデザートになった。私にとって、こんなにも嬉しい事はなかった。

翌日、乳房の無くなった胸が、切り開かれた。

私の肋骨は、一本、一本、丁寧に切り取られ、オーブンで焼かれてスペアリブとなった。

そしてついに、彼が私の心臓を取り出した。

それは、彼の手の中で、ドクンドクンとまだ脈打っていた。

「活きの良い心臓だね。君のハートは、僕がいただくよ」

そう言うと、まだ脈打っている心臓に、彼は喰い付いた。心臓から真っ赤な鮮血が噴き出し、辺りに飛び散った。彼の口の周りは、ケチャップがついたように、真っ赤になった。

「うん、しっかりとした歯ごたえがあるね。噛めば噛む程、深い味が滲み出てくるよ。う〜〜ん、これは美味だ」と彼は、ニヤリと笑った。口から血が滴り落ちた。

こうして私のハートは、全て彼に食べ尽くされてしまった。

私の体で残っているのは、もう頭と膣だけになっていた。
すっかり食べ尽くされてしまった私の肉体を見ると、彼の一部になれた様な気がして、とっても幸せな気持ちになった。
(もう私は、貴方だけのものよ。貴方だけの……)
そして彼は、ペニスを膣に挿し入れ、私を? 抱いて? くれた。
彼の抽送と共に、やがて頭の中が真っ白になり、私はイってしまった。
「いよいよ残ったのは、これだけだね」
彼はそう言うと、最後に残った膣を、細かく切り刻んで、串に刺した。
そして、それをコンロで焼き始めた。
「うん、君の膣はコリコリして、本当に美味しいよ。最高だよ」
彼は、串焼きにした私の膣肉を、全て食べ終えた。
もう私の肉体は、頭しか残っていなかった。

「今まで、本当にありがとう。久しぶりに美味しい女性に出会えたよ」
彼はそう言って、微笑んだ。
私は、彼に褒めて貰えたのが、本当に嬉しかった。そして、もう食べて貰える肉体が残っていない事が、とても哀しかった。涙が溢れ出てきた。

「泣かないで……」
彼はそう言うと、私の頭を持ち上げて、やさしく抱きしめてくれた。
彼の温もりを感じた。
「君を、僕の世界へ連れていくね」
彼は、私を持ったまま立ち上がると、押入れの襖を開けた。
するとそこには、広大な部屋があった。
(木造アパートの押入れの中に、どうしてこんな場所が……)
部屋には、薄暗い明かりが灯っていた。向こう側は闇に隠れていて見えなかった。部屋の床は、石畳で出来ている。じとっした湿った感じがした。
「ここは、僕のコレクション部屋だよ。今日から君も、僕のコレクションになるんだよ」
そう言うと、彼は、私の頭を、壁に据え付けられた棚の上に置いた。
部屋の薄暗さに徐々に目が慣れてくるに従って、私の視界に入って来たのは……部屋の棚に置かれた、数え切れない程の女性達の頭だった。数百、否、数千はあるだろう。様々な年齢、様々な人種、様々な時代、そして皆、とても美しかった。
「どうだい素晴らしいコレクションだろ？　ワイン好きな人が飲んだワインボトルのラベルを収集するように、僕は食べた女性の頭を

集めているんだよ」と彼が嬉しそうに説明してくれた。
「皆、今日から、新しい仲間が増えたよ。仲良くしてあげてね」と彼が大きな声で言った。

するとと彼女達は、私を見て、口々に言った「ようこそ新入りさん」

こうして私は、彼のコレクションの一部になった。

7　透明人間の一日

「と、透明人間ですか？」
　アール氏はびっくりして声を上げた。
「うむ、そうなのだ。この研究所で、わしが極秘に進めてきた研究が、ついに完成したのじゃよ」とエス博士が答えた。
「ほ、本当に透明になれるのですか？」
「あぁ、そのハズじゃ。だから、君に来てもらったのじゃ。君に、透明人間第一号になって貰いたいのじゃ」
「わ、私がですか？」
「そうじゃ、君しか適任者はおらん」

　エス博士はそう言って、十センチ程の円柱形の物体を取り出した。

「これが、透明人間化の装置なのじゃ」
「こ、こんなものが……　こんなもので人間が透明になれるのですか？」
「わははは、人間が透明になるなんて、不可能じゃよ。透明人間と言っても、実際に透明になる訳ではない。これは、その人間の存在を極限まで気薄化する装置なんじゃ」
「存在を、気薄化する？」
「そうじゃ。学校のクラスにも、いるかいないか誰も気付かない『空気のような存在』の生徒が一人か二人はおったじゃろ。この装置は、その状態を極限にまで進化させたのじゃ」
「い、いったいどうやって？」
「これを装着すると、耳には聞こえないある周波数の音を出すのじ

ゃ。その音が、周りの人間の脳に作用して、目の前にいても、その人間は見えなくなるのじゃ」
「ほ、本当ですか？　そ、それで何で、私が第一号に……？」
「君は、この研究所では『空気のような存在』じゃからの。なので、まず君で、これの実験をさせて貰いたいのじゃ。危険は何もないので、安心してくれたまえ」
「わ、判りました。ぜひ、協力させて下さい」
「うむ、ありがとう。感謝するぞ。それでは早速、服を全て脱いで全裸になってくれ」
「ぜ、全裸にですか？」
「当たり前だろ。服は透明化されないからな」
「そ、そうですね」

アール氏が服を脱ぎだした。小柄でぽってり太ったメタボリックな体が、露にされた。

「それでは、四つん這いになって、こちらにお尻を向けなさい」とエス博士。
「は、はい」とアール氏がお尻を向けると、
博士はその物体をアール氏の肛門に挿し入れた。

「ひゃ、ひゃぁ～ぁぃい。は、博士、い、いったいどうして……そ、そんな所に」
「ポケットもないのじゃから、体で入れる場所といったら、ケツの穴しかないじゃろう、わははは」

アール氏は、いきなり肛門の中に突っ込まれた物体に違和感を覚えたが、これで透明人間になれると思えば、それ位は我慢ができた。

「は、博士。私は、本当に透明になったのでしょうか？　自分の体は今迄通りに見えているのですが？」
「アール君、いったい君は、今どこにおるのじゃ？　勿論、実際に透明化する訳ではないから、自分で自分の体は見えるに決まっとるじゃろ」
「博士、私は今、博士の目の前に立ってますよ。本当に見えなくなったのですね」
　こうして、アール氏は『透明人間』になったのだった。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

　博士の研究室を出たアール氏に、廊下ですれ違う研究所の職員達は、全く気付いていない様子だった。
「本当に、私は透明になれたのだ」アール氏は、感慨深げに呟いた。
　すると前から、同じ研究チームの理恵ちゃんが、やって来た。アイドルの様な顔立ちと、むっちりとした体つき、特に肉付きの良いお尻は、お尻フェチのアール氏にとっては、憧れの的であった。気付かずに通り過ぎた理恵ちゃんの後ろを、アール氏は足音を忍ばせて追った。
　理恵ちゃんが、階段を上っていく。ミニスカートからのびるムチムチの太ももと、お尻の二つの肉山がとっても悩ましい。アール氏は、階段に低く身をかがめて、下から理恵ちゃんのスカートの中を覗き込んだ。

パンティーはピンクだった。

「やったー！　理恵ちゃんのパンティーが見えたぁ〜。透明人間になって良かったぁ〜」

アール氏は、感激に身を震わした。そしてアール氏は、階段の隅に座って、他の女子職員達が来るのを待っては、スカートの中を覗きこんだのだった。

「そろそろお風呂の時間だな」

次にアール氏は、研究所に隣接する女子寮の風呂場へと向ったのだった。勿論、透明人間の定番行為、お風呂の覗きをする為である。

アール氏は、ある薬品会社の研究所に勤めていた。危険な細菌や薬品を扱う為、研究所は人里離れた辺ぴな場所に建てられていた。一番近い町へも、車で二時間以上かかる所である。なので、ここに勤める研究員達は、全員が職員寮で生活しているのである。

女子寮の中に入った。通常は男子禁制の場所であるが、どうどうと管理人室の前を通っても、全く呼び止められもしなかった。当たり前である。アール氏は「透明人間」なのだから。

アール氏は、女子大浴場へ向った。まだ時間が少し早かったので、誰も入っていなかった。アール氏はしばらくそこで待つ事にした。やがて、賑やかな声と共に、五名の若い女性達が入って来た。もう気心しれた仲なのか、タオルで前を隠すこともなく、どうどうと全裸である。大きなものから、平らなものまで、合計十個のおっぱいが、アール氏の前に晒されていた。下の毛も、ボワボワの剛毛の娘

から、女性器が殆ど見えてしまっている毛の薄い娘までいた。
アール氏の分身は、もう興奮で先程からビンビンの勃起状態である。右手で分身を上下に擦りながら、女性達のおっぱいを至近距離で眺め、股間を覗き込んだ。

「うっ、うぅ、うっ〜〜〜っ」アール氏は、毛の薄い女性の、ピンク色のビラビラ肉を見て、興奮でついに射精してしまった。
「ま、まずい。ザーメンは見えるのかな?」と一瞬あせったが、女性が体を流したお湯で、アール氏の精液も排水口へと流されて行った。どうやら気付かれずに済んだみたいだった。

その後も、アール氏はお風呂場で、女子職員ほぼ全員の裸を見て過したのだった。アール氏にとって、この日は人生最高の幸せを感じた日であったのは言うまでもない。

そして、入浴時間もほぼ終わりになった頃、憧れの理恵ちゃんが入ってきたのだった。きっと、いなくなったアール氏の分も作業が増えてしまい、今夜は残業になったのだろう。

「御免よ、理恵ちゃん。この埋め合わせは、今度必ずするからね」とアール氏は心の中で謝った。

理恵ちゃんが、体を洗い始めた。大きな胸はEカップはありそうである。しかし、乳房の大きさとは反比例して、桜色の乳首はとっても小さかった。肉付きの良いプリッとした形のいい大きなお尻は間近で見ると迫力満点である。アール氏は、理恵ちゃんのお尻に顔を近づけて、匂いを嗅いでみた。彼女のギュッと締まったか細い腰のくびれが、胸とお尻の肉付きの良さを更に強調している。まさにパーフェクトボディとは、彼女の為にあるような言葉だと、アール氏は思った。

理恵ちゃんが体を洗うのを見ながら、アール氏は自分の分身を擦った。そして、その夜五度目の精を発射した。

理恵ちゃんがお風呂から上がると、アール氏もその後ろについていった。脱衣所で服を着る彼女を眺める。

「服は脱ぐ時よりも、着る時の方がエロいなぁ」とパンティーを穿いている理恵ちゃんの姿を見ながらアール氏は思ったのだった。

そして、理恵ちゃんの後について、彼女の部屋へと入った。初めて入る憧れの理恵ちゃんの個室である。部屋は、キレイにざっぱりと片付いており、ぬいぐるみ等が置いてあって、いかにも女の子の部屋という感じだった。

理恵ちゃんは、ベッドの上で本を読み始めた。近づいて本のタイトルを見てみると『出歯亀先生のエロ診察日記』だった。エロ小説じゃないか……憧れの理恵ちゃんが、夜中に一人でエロ本を読んでいるのは、ちょっとショックだった。

更に理恵ちゃんは、スエットのズボンを脱いでパンティー一枚になると、その上から自分の陰裂を擦り始めた。

「あぁ〜〜ぁん、あぅん、はぅ、あぁ、いぃ、あぁ〜〜ぁん、あぁ、あ、あ、あぁ」

アール氏が、理恵ちゃんの股間に顔を近づけてみていると、パンティーに段々と楕円形の染みが広がってきていた。もうあそこは、濡れ濡れ状態のようだった。アール氏は自分の分身を擦りながら、理恵ちゃんのオナニーの観察を続けた。

「あぁ、あぁ〜ぁん」

理恵ちゃんは体を大きく仰け反らせて、イってしまった。そして、アール氏も発射してしまった。さすがに本日六度目の発射なので精液の量は少なかったが、理恵ちゃんのベッドのシーツに小さな染みをつくってしまった。

「はぁ、はぁ、はぁ、あぁ～ぁ、気持ちよかったわぁ。あれ？　何かしら？　変な臭いがするわね」

「ま、マズイ。理恵ちゃんが、ザーメンにの匂いに気付いたのかな？」

くんくんと理恵ちゃんは臭いを嗅いでいたが、何かは判らない様子だった。そして、そのまま寝てしまった。

アール氏は、ほっとした。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「ぎゃははははぁ～」

研究所の職員達が集まって、大声で笑っていた。

「お風呂で、私の股間をみて、せんずりしてたんですよぉ～」

「階段の所でも、うずくまって、下から覗き込んでいたしぃ～」

「私も、お風呂場でおちんちんを擦っているのを見ましたよぉ」

「私なんか、部屋にまでついて来たので、オナニーしてみせてあげたら、私のベッドの上に射精するんだもん。もう嫌になっちゃうわぁ。きゃははは」と理恵ちゃんも大声で笑っていた。

ここは人里離れた研究所である。職員達は全員とっても退屈していた。そこで約一ヶ月かけて、皆で協力し合って、四月一日のアール氏への悪戯の計画を念入りに仕込んだのだった。

「最後に、エイプリルフールの嘘だったたってバラすつもりだったのに、アール氏はいったいどこにいっちゃたんでしょうかね、博士？」
「もしかしたら、本当に透明人間になってしまったのかな？　あははは」とエス博士。
「アナルバイブじゃ、透明人間にはなれませんよ。にゃははは」と理恵ちゃん。

すると職員の一人が、血相を変えて飛び込んで来た。
「は、博士、大変です。テレビのニュースを見て下さい！」
エス博士は、あわててテレビのスイッチを入れた。

「今朝から町のあちこちで目撃されていた全裸の男性は、先程、女子高に侵入した所を職員らに取り押さえられ、警察に逮捕されました」
「何でもその男性は、自分は透明人間なのに何故見えたのだと、騒いでいたそうですよ」
「春になると、色々と変わった人が出てきますので、皆さんも気をつけて下さいね。以上、お昼のニュースでした」
さすがに、笑う者は、もう誰一人としていなかった。

7　透明人間の一日（後書き）

人里離れた薬品会社の研究所で、「透明人間になる薬」を飲んだ男性がとった行動とは……

（コメディ）

8　噛まれたい女（前書き）

噛まれたい願望の女性が迎えた結末とは……

（詩小説ですが、オチはあります）

8　噛まれたい女

ホントは少しでいいから、噛み切って欲しぃ。
だって、噛み切られたキズは、一生、消える事がないから……　。
貴方とのセックスは、いつもフルコース。
いつも、私の体中を噛んでくれる。

まず私は、細くて長い首を貴方に差し出す。
露になった、私の蒼い血管。
貴方は首筋のあたりを、吸血鬼のように噛む。
そのひと噛みで、私は、きっと息絶えてしまう……。
そう思っただけで、私は、最高に興奮してしまう。
まるで、吸血鬼の魅力に獲り憑かれた乙女のように……私の体にスイッチが入る。
そして私の女の部分が、豊かな潤いを蓄え始める。

貴方に耳を噛まれて、私は……痙攣する。
熱い吐息が耳の中に吹き込まれ、興奮が……さらに増していく。
私の柔らかい耳朶を、貴方のその口で喰いちぎって欲しい……。

あぁ、そして貴方は、私の乳房に……。
私の真っ白で大きな乳房が、貴方の歯型で真っ赤に染まるくらいに強く噛んで。

(い、痛い！　あっ。そ、それが、き、気持ちいいぃ～ぃ)

そして、乳首を噛んで……。

舌先で転がして……吸い上げて……強く吸い上げて……そして、噛む。
噛んだまま、乳首をおもいっきり強く引っ張る。
乳首が、ぐぃ～ぃと伸びている。
（ち、千切れちゃうよ……乳首が千切れちゃうよぉ……あ、あぁ、感じるぅ……気持ちいいよぉ）

乳首が、真っ赤に充血して、固くなってくる。
ズキズキと痛んでいる。
これこそ、最高の快感！

さらに貴方は、背中、二の腕、お尻、足、内股、そして、局部へと移動して……歯型を残していく。
あぁ～ぁ、私の全身は、あなたの歯型だらけになっていく……。
私の体すべてに……貴方の＃印――しるし――＃を残して……だって私は、貴方のものなのだから。
体中が、ズキズキと痛んでいる。
あぁ～あ、なんという心地良さなのだろう。
貴方に食べられそうな……そんなスリルに下半身がゾクゾクと興奮して熱くなる。
あぁ～ぁ、いっそ貴方に食べられてしまいたい……そしたら永遠に貴方の一部になれるから。

「駄目よ。今日は危険日なのよ。危ないわ」

そんなあたしの言葉を無視して、あなたは、あたしをベッドへと

誘った。
思いっきり喰い千切りたい衝動を、懸命に抑える。
力強く噛みたいけれど、噛めないもどかしさに、歯茎がムズムズしている。

ギリギリと歯が肉に食い込んでいく、あの感触。
噛み付かれている最中のあなたの恍惚とした表情。
そして、真っ赤に腫れあがっている噛み痕。

あぁ、たまらない。
我慢できない……でも、あたしは必死に衝動を抑え込む。
思いっきり噛み千切りたい……あなたの局部を……この柔らかくて美味しそうな、二枚の恥肉を……。

だがその時、

あたしの衝動を包み込み、抑えていた、分厚い闇のベールが……途切れてしまった。
月を覆い隠していた暗い雲の切れ間から……満月が顔を出したのだ。

そして……

闇夜を切り裂くような女の悲鳴が、部屋中に響き渡った。

そしてベッドの上には、口から真っ赤な鮮血を滴らせた、オオカミ女がいた。

9　家畜男達の受難（前書き）

二十二世紀、男子の出生率は著しく低下し、社会は女性が管理している。数少ない男性達は、貴重な精子の供給源として、政府によって厳重に管理され、計画的に搾精されていた。そんな中、セックスをしてみたいと願った女性達が取った行動とは……

（ＳＦコメディ）

９　家畜男達の受難

「んぐぅ、あうぅ、んごぉ、んぐぅ」
私は首を上下に激しく動かしている。
「明日香、それ位でやめときなよ。もう射精しそうだよ」
私は咥えていたペニスから、口を離した。
「うん、そうだね。そろそろやばそうだ」
私が口を離すと、早百合が搾精器をペニスの先端部に取り付けて、茎をしごき始めた。
「うぅ、うぅぅ、おうぅ」
男が呻き声を上げると同時に、搾精器が精子を絞り出し、容器の中にドロリとした白乳色の濁り液が溜まっていく。
「１０ｃｃか……結構出たわ。Ａ１５１９６５号、さすがね。よく頑張ったわね」
私は搾精器を外しながら、家畜男の事を労った。
今は、二十二世紀。
環境ホルモンの影響なのだろうか、この百年の間に、男子の出生率は著しく低下してしまい、男性が生まれてくるのは、今や一万人

に一人の割合でしかなかった。
　この社会では政治・経済・文化等、全てが女性達によって管理・運営されている。
　数少ない男性達は、貴重な精子の供給源として、政府によって厳重に管理され、計画的に搾精されていたのだった。

「W１４８９１２号、搾精の時間よ」

　私と早百合の二人は、今日の搾精予定表をみて、次の家畜男の部屋に入った。
　私達二人は、「独立行政法人　国立精子管理センター」の職員だった。
　この国の男性は全員、全国に数箇所ある我々のセンターで家畜男として飼育されているのだ。
　家畜男達は、常に健康状態をモニターで管理され、年齢・体調等に合わせて計画的に搾精されていた。
　我々二人の仕事は、家畜男からの精子の搾精作業である。

　部屋に入ると、四十代の中年男が、ベッドに横たわってテレビを見ていた。
　両手は鎖で壁に括り付けられている。
　これは家畜男が勝手にオナニーをしないよう、用心の為である。
　私達は貴重な精子を一滴たりとも無駄にする事は許されていなかった。

　早百合が、W１４８９１２号のズボンを脱がして、ペニスを取り出し、口に咥えた。
　舌を絡めるようにして亀頭を刺激し、さらに舌先を裏スジから玉袋へと這わす。

家畜男は、気持ち良さそうに目をつぶっている。
小さかったペニスが、徐々に大きさを増し始めた。

こいつら、家畜男には、名前は与えられていない。
男として生まれたら、即、政府の管理下におかれ、番号だけが与えられる。
やがて血統や精子の質、等によって、AからZまでの等級付けをされるのである。
Wにランクされているこいつは、見るからに不細工で、かなりの下級家畜である。
一般庶民、それも低所得者向けの精子供給用家畜だった。

W148912号のペニスはギンギンに勃起して、天井を向いてそびえ勃っていた。
そのペニスをまじまじと眺めて、早百合がポツリとつぶやいた。

「セックスしたいわ」
「えっ？　今、何ていったの？」
「一度でいいから、このおちんちんを、私のおまんこの中に入れてみたい……」
「そんなの、もし見つかったら大変だよ。クビになるだけじゃすまないよ。横領罪で捕まっちゃうよ」
「そ、そりゃ判ってるけどさ。射精させなくても、挿入だけでもいいからさ」
「もし、万が一、射精しちゃったらどうすんのよ」
「そ、そうだよね……」
「私達は、おちんちんに直に触れるだけ、まだ幸せだよ。世の中の多くの女性達は、一生の間に、一度も本物のおちんちんを見ずに死んでいくのだからね」
「でも、これってさ、いわゆる蛇の生殺し状態だよ。もう私のあそ

こ、濡れ濡れなんだもの」

「だから、それは後で、バイブでオナればいいでしょ」

「そりゃ、本物を見たことがなければバイブでも満足できるだろうけどさ。一度でいいから、本物を味わってみたいのよ」

家畜男から絞り出された精子は、すべて人工授精によって、受精が行われていた。

そして女性達は、バイブによって、その性欲を補っていたのである。

「政府の高官達は、Ａクラスのイケメン男をセックス用に飼っているっていう噂だよ」

「それはあくまでも単なる噂でしょ」

「そ、そうだけどね。はぁ～ぁ、こんな不細工な中年男のでもいいから、本物のおちんちんを入れてみたいわ」

早百合はしぶしぶと搾精器をペニスに取り付けて、搾精を開始した。

その数日後。

「ねぇ、聞いて聞いて。私、ネットで凄いもの見つけちゃったの」

早百合が興奮して、私の所にやってきた。

その手には、数枚の紙が握られている。

「見て見て。これ、バイアグラの製造方法」

「バイアグラ？　何、それ？」

「昔、使われていた男性のペニスを勃起させる薬だよ」

「そんなものどうするの？」

「私にね、凄くいい案が浮かんだの」
そう言って、早百合はニヤリと笑った。
その早百合の案とは……。
精巣機能が衰え、精子製造が出来なくなり家畜として処分された老人にバイアグラを与えて、セックスを試みるというものであった。
精子が出なくなったとはいえ、殺してしまう訳にもいかないので、老人達はセンターの片隅で飼われて、その余生を送っていた。

「本当におちんちんが勃つのかな？　もう散々絞り取られた後の絞りカスだよ、あいつらは」
「だから、バイアグラを使うんじゃない。この成分なら入手可能だから、私でも作れるわ」
「そうね。それなら捕まる事もないもんね。その話、乗ったわ」
「よ〜し。私達、セックスするぞ〜！」

老人センターで、私と早百合は、過去の飼育データを手に、老家畜達を眺めていた。

「早百合、本当に大丈夫かな？　皆、かなりのヨボヨボだよ」
「そうねぇ、なるべく活きの良さそうなのが、いいわよね。誰にしようか？」
「それと、どうせならおちんちんのデカいのが、いいわよね」
飼育データにはその家畜の搾精回数とかの記録はあるけど、ペニスのサイズは記載されてなかった。
私達が悩んでいると、後ろから突然、声をかけられた。
「あなた達、こんな所で何をしているの？」

振り向くと、部長が立っていた。

「ぶ、部長」

早百合が肘で私を小突いて、小声で話しかけてきた。

「ねぇ、部長に聞いてみようよ」
「部長に？」
「部長なら、きっとこの老人達を搾精したことあるから、おちんちんのサイズを覚えているかも知れないよ」
「あなた達、そこで何こそこそと話してるの」
「あ、あの部長、ちょっといいですか？」
「何？」
「部長は、この老人達の搾精をしたことありますよね」
「えぇ、私が若かった頃は、彼らも現役で頑張ってくれていたからね。とっても懐かしいわ」
「部長が今まで見た中で一番大きなペニスは、この中だと誰ですかね？」

(早百合、ダイレクト過ぎだよ)

「どうしたの、急にそんな事を聞いて」
「いいえ、明日香が知りたいって……」

(おいおい、私かよ)

部長が私の顔を見て、少し考え込んだ。

「そうねぇ、一番大きかったのは、やっぱりあのＳ０９８９１２号かしらね」

そう言って、部長はテーブルに腰掛けている小柄な老人を指差した。

「あんなに小さな老人が？」

「えぇ、勃起した時なんか、私の口に入りきらない程、大きかったわよ」

「そ、そんなに……」

「明日香さんは、そんな事を聞いてどうするの？」

「い、いえ……男性の見かけとペニスの大きさの相関関係について、ちょっと研究をしようかと……」

「あら、そうなの。よく鼻の大きな男性は、ペニスも大きいって聞くけどね」

部長にそう言われて、S098912号を見ると、鼻がとっても大きかった。

「ど、どうもありがとうございます」

「お役に立てたかしら、うふふふ」

部長はそう言い残して、去っていった。

「ターゲットはS098912号だね」と早百合。

「うん」と私は答えた。

夕食後、私達はS098912号を呼び出した。

老家畜は、穏やかな表情を浮かべ、私達の前に立っていた。

家畜達はとてもおとなしい。

生まれた時から、女性には一切反抗しないように躾けられている

からだ。
余計な事を考えないようにと、教育もまったく与えられていない。男性は精子を製造する為だけに生まれ、そして、死んでいく。それが家畜の宿命だった。

「こっちへ来なさい」

私達は、S０９８９１２号を空き部屋へと連れて行った。
バイアグラは予め、与えてあった。

「与えた薬はちゃんと飲んだ？」
「はい、飲みました」
「それじゃ、ベッドで横になって」
「はい」

S０９８９１２号は、ベッドに横たわった。
私はゴクリと生唾の飲み込み、ズボンを脱がして、ペニスを取り出した。
だら〜んと、それはだらしなく垂れていた。

「確かに、大きいけど……本当に勃つのかな？」
「とりあえず、フェラしてみようよ」
「うん、そうだね」

私と早百合は、左右から一緒に、その巨大なペニスに舌を這わした。
亀頭を咥えてみる。
半分も飲み込まない内に、喉の奥に当たってしまった。

「かなり大きいね」

「うん、色も真っ黒で、かなりの年季ものだよ、このおちんちん」
二人は、手で茎をしごきながら、舌先でカリ裏、裏スジ、玉袋、蟻の門渡り、アナルを刺激した。
「おぅ、うぅぅ」
S09912号が、とっても気持ち良さそうな顔をしている。
「感じてるみたいだね」と私。
「そりゃ、センターきってのテクニシャンの二人が、同時に攻めているんだもの、気持ち良いに決まってるじゃん」
S09912号のペニスの中に、ドクンドクンと血液が流れ込んでいくのを感じた。
そして、徐々に固くなり始めて来た。
「固くなって来てるよ」
「うん、やったね。あと、もうちょっとだよ」
数分後、S09912号のペニスはついに完全に勃起して、巨大なタワーが再びその姿を現したのだった。
「ヤッター、勃ったよ」
「大成功だね」
「誰から入れる？」
「それじゃ、ジャンケン」
「ジャンケン、ポン」
「わぁ、私が勝っちゃた。早百合、お先に御免ね」
「いいけど、射精はさせないでよ。途中で交代してね」

「は〜い」

私は、S０９８９１２号の上に跨って、膣穴にペニスの先端をあてがった。
そして、ゆっくりと腰を降ろしていった。
ズブ、ズブ、ズブと、肉棒が私の中に入ってくる。
はぁ〜、凄い。温かくて、ドクンドクンと脈打っているのを感じる。これがペニスの感触なんだ。
私はお尻を上下に動かした。
亀頭のエラが、私の肉壁をこそげとるように刺激している。
「あぁ〜ん、凄いわぁ。気持ちいぃ、あぁ〜ぁん」
深く腰を落とすと、ペニスの先端が私の子宮をグィグィと押し上げてきて、子宮が揺さぶられる。
はぁ〜ぁ、凄い。
私はいつの間にか、無意識のうちに必死になって、お尻を振っていた。
頭の中が、段々と真っ白になって来て、そしてついに……。
「い、いっくぅ〜ぅ、あぁ〜ぁ、いくぅ〜ぅ」
私は、絶頂に達してしまった。
凄い……凄過ぎる。本物のペニスは……やっぱり違うよ。
「明日香、早く交代してよ。私、もう……堪えられないよぉ」
私はもう少し余韻に浸りたかったが、早百合と交代した。
早百合も、S０９８９１２号の上に跨って、ペニスを蜜壷の中に埋めた。

「あぁ〜ぁ、凄いわぁ。私のおまんこが、パツパツだわぁ。いっぱいになってるぅ」

早百合も激しく腰を動かしながら、S09891２号のペニスを楽しんでいる。

ズブリと深く腰を落とせば、早百合の尻肉がぶつかって、パン、パンという音が響いている。

「子宮が突き上げられてるよぉ、凄いよぉ。あぁ〜ぁ、駄目ぇ〜。逝きそうぅ〜ぅ、あぁ〜ぁ」

その時だった。

「あなた達、こんな所で何やってるの？」

部長が部屋に入って来た。

「ぶ、部長……」

早百合はセックスに夢中になっていて、まだ部長に気づかないらしく、必死になって腰を振っている。

「やっぱり、こういう事だったのね」
「はい、申し訳ありません」
「でもよくS09891２号のペニスが勃起したわね。私が、何度もトライしても駄目だったのに」
「えっ？　部長がトライ？」
「そうよ。私もあのおちんちんの味が忘れられなくて、何度かセッ

クスしようとトライしたのよ」
「部長もですか？」
「うふふふ、皆、考える事は同じね。それで、いったいどうやったの？」
「バイアグラを飲ませて……」
「バイアグラ……そんなものがよく手に入ったわね」
「早百合がネットで製造方法を見つけて、作ったんです」
「なるほど、そういうことね」

部長はそう言うと、パンティーを脱ぎ出した。

「ぶ、部長」
「私も仲間に入れてね。あのデカチンを見るの、十数年ぶりだわ」

こうして部長も仲間に入り、私達三人はＳ０９８９１２号のペニスを十二分に堪能した。

やがて、この噂は瞬くまにセンター中に広がり……。

リタイヤして平穏に暮らしていた老家畜男達は、皆、バイアグラを飲まされて、我々の性具として、さらにリサイクル利用される事となったのだった。

１０　エロでエコ（前書き）

エッチで発電する、ただそんなお話です。

（コメディ）

10　エロでエコ

「はぁ、はっ、はぁ、はっ、はぁ、はっ」
「きゃははは。やっぱ、こいつら超面白いわ、きゃははは」
「はぁ、はっ、はぁ、はっ、はぁ、はっ」
「もう最高。マジうける、ぎゃははは」
「はぁ、はっ、はぁ、はぁぁっ……も、もう駄目だぁ～ぁ」

プツン。テレビの画面が真っ黒になった。

「ねぇ、ちょっと！　何で動き止めちゃうのよ。今、いちばん面白い所だったのに！」
「だ、だって、もう一時間以上も腰を振り続けて、もうクタクタなんだよ」
「情けない男ね。エッチさせてあげてるんだから、頑張りなさいよ！」
「で、でも……」
「『エッチさせてくれるんだったら、何でもする』って、約束したでしょ。つべこべ言ってないで、早くして！」
「は、はい……」

青年は、また腰を振り始めた。腰につけた装置のＬＥＤが緑色に光り、給電が開始された事を示している。
液晶テレビに、また深夜のお笑い番組が映しだされた。
２０ＸＸ年、国会でついに『家庭エコ法』が可決され、国民は家庭での電力消費量の半減を義務化されたのだった。
それにより、家庭への電気の供給は半分に減らされることとなっ

た。
富裕層は屋根の上に太陽電池パネルを設置して、減らされた電力を補う事が出来た。
しかし、そんな金銭的な余裕がない人達は、大幅に節電をするしかなかった。
そして発売されたのが、歩行などの継続的な動きを電気に変換する発電機であった。
この装置は電磁誘導方式による発電の効率性を大幅に高めて小型化したもので、従来の運動エネルギーシステムの十倍以上の電力を供給する事ができた。当初は携帯やノートＰＣ等のモバイル機器の充電器として利用されていたが、やがて家庭での利用にも広まっていったのである。

「はぁ、はっ、はぁ、はっ、はぁ、はっ」
青年は必死になって、腰を振り続けている。額からは玉のような汗が吹き出していた。

「きゃはははは。やっぱ、こいつら最高、きゃははは」
若い女はテレビ番組を見て、馬鹿笑いをしている。
「はぁ、はっ、はぁ、沙織、どうだい？　気持ちいいかい？　はぁ、はっ、はぁ」
「うるさいわね、テレビに集中出来ないでしょ。あんたは黙って腰を振ってなさい！」
「は、はい」
それから、三十分間、青年は黙々と腰を振り続けた。

「あぁ～ぁ、面白かった。さて、そろそろ寝ようかな」
「はぁ、はっ、はぁ、はっ……も、もう発射してもいいかな？」
「まだ駄目よ。明日の朝ご飯用に、炊飯器の充電もしておいてね」
「す、炊飯器も……はぁ、はっ、はぁ……」
「それじゃ、私はもう寝るから。おやすみ」
「で、でも……充電は？」
「自家発電すればいいでしょ。それじゃね、おやすみ」

そう言うと、若い女は横を向いて、すやすやと寝てしまった。
その隣には、右手をしこしこと上下に動かして、黙々と充電を続ける青年の姿があった。

１１　透明人間になった僕（前書き）

何故か透明人間になった僕は、幼馴染の彼女の部屋に……僕の目の前で彼女はオナニーを始めた。
（最後はちょっと悲しいお話です）

１１　透明人間になった僕

　僕、透明人間になっちゃた。
　いったいどうしてなのかはよく判らないけれど、気がついたら透明になっていたんだ。
　しかも、何故か僕は今、裕子（ゆうこ）の部屋の中に立っているんだ。
　裕子は僕と同じ中学三年生で、うちの隣りに住んでいる幼馴染み。
　とっても明るくて、可愛くて、クラスの中でも断トツの人気者なんだ。

　勿論、僕は裕子のことが大好きさ。

　でも、ずっと裕子とは一緒だったから、今更告白するのも……ってな感じで、今でも裕子とはとっても仲良しだけれど、二人は恋人ってなワケではないんだ。

　そして今、裕子はベッドの上で横になっている。
　でも、寝ちゃってるワケじゃないよ。
　だってまだ夜の八時過ぎだから、寝る時間じゃないし……。
　それに僕たちはもうじき高校受験だから、寝てる暇なんてないし……。

　裕子は……ベッドの上で横たわって……オナニーをしている。

　僕だってオナニーはよくするし、オナニーは気持ち良いから大好きだよ。
　でも、裕子がオナニーをするとは……イメージ的にちょっと意外だった。

これって偏見なのかな。可愛い女の子はオナニーなんかしないって思い込んでいた、僕の偏見なのかな。

裕子は股を大きく開けて、淡いピンク色のパンティーの上から、女性のあの部分を上下にさすっている。
割れ目に沿って、パンティーに溝が出来ている。
そして……その部分に……薄っすらと……濃い染みが出来始めていた。
静かな部屋の中で、裕子の息がハァハァと荒くなってきている。
アイドル顔負けの綺麗な顔が、薄っすらと赤らんでいて、さらに美しくなったように感じた。

スゴい……これが、女の子の……裕子の……オナニーなんだ。
僕は、初めて見る女性のオナニーシーンになんともいえない感動を感じていた。
そして、僕の体が透明なのを良いことに、僕は裕子のあの部分に顔をぐっと近づけて、まじまじと裕子の指の動きを観察し続けた。
見ていると、僕のおちんちんも、段々と大きくなってきた。
裕子の指の動きに合わせて、僕もおちんちんを上下に擦り始めた。

僕は裕子と一緒にオナニーをしているんだ……そう思うと、いっそう興奮が増してきた。
すると、裕子がパンティーに手をかけて、スルスルと脱ぎ始めた。
少し腰を上げて、パンティーを膝の方へ下げていく。
丸くて真っ白なお尻が、パンティーの下から姿を見せ始めた。
そして、黒くてフサフサで柔らかそうなあそこの毛が……見えてきた……密集度は薄い感じだった。
パンティーが膝まで、押し下げられた。
染みの部分から、銀色の粘糸が……裕子の大切なあの部分へと繋がっていた。

初めて見る裕子の、あそこ。初めて見る、女性のお○んこ。
小さい頃は、何度も裕子と一緒にお風呂に入っていたらしいが、そんなの全く覚えていない。それに、その頃のあそこと今のとじゃ、多分、かなり形状も変わっているハズだろうし……。

今、僕の目の前、数センチの所に……パックリと漆黒の口を広げた裕子のお○んこがある。
これが……お○んこ……なんだ！！

ふっくらと発達したお肉の土手の間から、鶏のとさかみたいな形をした、濃いピンク色の柔らかそうな2枚のビラビラ肉が顔を覗かせていた。
そして、その上の方にはピンク色の小さな肉の突起があった。
きっとこれが、クリトリスなんだと思う。
裕子が親指の腹で、その小さな突起をスリスリと擦り始めた。
はぁあ……はぁあ……と、裕子の息がさらに荒くなって来た。

僕は顔をぐっと近づけて、クンクンと裕子のあそこの匂いを嗅いでみた。
ちょっと甘酸っぱくて刺激的な匂いが、僕の鼻腔を刺激した。
僕のおちんちんは、ビンビンに膨らんで、今にもはちきれそうになった。
おちんちんを擦る手にも、力が籠もる。

すると、裕子の白魚の様な指が、するりとビラビラ肉の奥にある暗い穴の中に吸い込まれていった。
あれが、お○んこの穴……なんだ。
あそこに、この棒を入れるんだ……。
僕は、おちんちんを握りしめて、ごくりと生唾の飲み込んだ。

裕子は、ゆっくりと指を出し入れしている。
白くて細長い指が、根元までズブズブと吸い込まれいく。
そして、指が動く度に、くちゃ、くちゃという湿った音が、静かな部屋の中で卑猥なリズムを奏でている。
あぅ、あぁあ、あぅぅぅ。か細かった裕子の喘ぎ声が、次第に大きくなってきている。

「あぅ……あっ、あぁぁぁあ……」

裕子が、ひと際大きな声を出して、体をぴ~んと仰け反らした。
そして、ベッドの上で、ぐったりとなってしまった。
これは多分、僕が射精する時と同じ様に、裕子も？逝った？んだと思う。

「はぁ、はぁ……た、たけしぃ……はぁ…」と、激しい呼吸の合間に、絞り出す様に裕子の声がした。

えっ？　たけしって、僕の事？
まさか裕子、僕をオカズにオナニーをしていたの？
そりゃ僕は、毎晩の様に裕子をオカズにしてオナってるけどさ、まさかね？　その逆？　有り得ないよね？
それとも、まさか？　えっ、マジで？？？

一階から、裕子のおかあさんの呼ぶ声がする……裕子に電話みたいだ。
裕子があわててベッドから飛び起きて、膝までズラしたパンティーを引き上げた。
そして、ドタドタと階段を駆け下りていく。
僕も裕子の後を追って、一階に降りて行った。

電話の相手は、いったい誰なんだろう？
すると、受話器を握っている裕子の顔色が一瞬にして変わった。
強張ったっていうか……驚いたっていうか……とにかく尋常ではない表情だ。

そして裕子は、そのまま玄関から飛び出して駆け始めた。
おいおい、パンティーくらい穿き替えたらどうだい。染み付きだよ……なんて呑気な事を考えながら、僕もとりあえず裕子の後を追った。
陸上部のエースの裕子に対して、僕は帰宅部である。
裕子の全力疾走の後をついて行くのは、とっても大変だ。
それでもなんとか見失わないように、裕子の後をついて走った。

そして、裕子は市民病院の中に駆け込んでいった。
病院には、僕たちの担任の市川先生、僕の親友の啓太と幸司、それにクラスの仲間たちがいた。

いったいどうしたんだろう？

すると、病室の扉が開いて、僕のお父さんとお母さんが……。
えっ、どうして二人がここに？
ぞろぞろと皆が病室の中に入っていく。
僕も後ろからついて入っていった……。
病室の中央にあるベッドの上に……僕が横たわっていた。
えっ、どうして僕が？　だって、僕はここに？

「お別れはすんだのかしら？」

突然、後ろから声がしたので振り返った。
僕の後ろには、白い服を着たとっても綺麗な女性がにこやかな笑みを浮かべて立っていた。

そうだ、思い出した！
僕は塾の帰り、自転車に乗っていて、交差点でトラックに衝突されて……死んだのだった。

「うん、済んだよ、死神さん」

この綺麗な女性は死神さんなんだ……僕をあの世に連れていくための。

「うわぁぁぁぁ」
「たけし、たけし、たけしぃぃぃ」

お父さんも、お母さんも、市川先生も、啓太も、幸司も、クラスの皆も……泣いている。
大声で泣いたり、すすり泣きしたり……ボロボロと涙を流していた。

「い、いやぁぁぁぁ〜〜ぁ」

裕子が、ぺったりと床に座り込んで、大声で泣きじゃくっている。
市川先生が、裕子の肩を後からそっと抱きしめた。
みんなが泣いているのを見て、僕は、とっても辛くなって来た。
皆、御免よ。本当に御免よ。

「そろそろ行かないと」と死神さん。

「うん、判った」

みんなとはもう会えないんだね。
お父さん、お母さん、今まで育ててくれてありがとう。
先に死んじゃって、本当に御免なさい。
市川先生、いつも心配かけて御免なさい。
啓太、幸司、お前らともっと一緒に遊びたかったよ。
クラスの皆、受験の大切な時期なのに、迷惑かけてしまって御免なさい。
そして、裕子。本当に、本当に、御免なさい。
それと最後に、ありがとう。
出来れば、僕のこと、ずっと忘れないでいてくれると嬉しいなぁ……。

死神さんの体が、白く輝きだした。
眩しいや。光しか見えないよ。
あっ、僕の体が光に包まれていく……
段々と意識が……薄れて……いく……
さようなら……さようなら……さようなら……

１２　僕はバナナ（前書き）

朝起きた僕はバナナに…
（好きな人に食べられたい……そんな願望のお話です）

１２　僕はバナナ

朝起きたら、僕はバナナになっていた。

（ここはどこだろう？）

どこか見知らぬ家の食卓の上に置かれている。

トントントンという軽快な足音が聞こえ、セーラー服姿の山崎さんが階段を下りてきた。

（そうか、ここは山崎さんの家なんだ）

クラスのマドンナ的存在の山崎さんはいつ見ても、もの凄く可愛い。

人生で一度もモテた事がない僕にとって、山崎さんはまさに高嶺の華的な存在だった。

「太くて美味しそうなバナナ」と言って、山崎さんは僕を手に取った。

そして僕の皮を剥き始めた。

（憧れの山崎さんが僕の皮を剥いてくれている）

興奮でワクワクしてきた。なんだかとっても嬉しかった。

山崎さんは僕の皮を全部剥くと「いただきま～す」と言って、可愛らしい口を大きく開けて僕にがぶりと噛み付いた。

（あぁ〜っ）

まるで射精した時の様な恍惚感を感じた。とっても気持ちぃい。

山崎さんが僕の一部をかじり取って、美味しそうにモグモグと噛んで食べている。

（山崎さんが僕を食べてくれている）

そう思うと何とも言えない高揚感を感じた。バナナなのにドキドキしている。

山崎さんは僕を飲み込むと、またパクリと僕に噛みついた。

（あぁ〜ぁ、すっごく気持ちぃぃ）

またしても射精時の恍惚感に包まれる。気持ち良過ぎて体がとろけそうだ。

山崎さんはモグモグと噛んでは、また可愛らしい口で僕にパクリと喰いつく。

大好きな山崎さんに食べられる度に、僕は恍惚に浸り何度も昇天した。

（幸せだ。僕はなんて幸せなんだろう）

美味しそうに僕の事を食べてくれている山崎さんの顔を眺め、僕は最高の幸福を感じた。

そして、とうとう僕は最後の一口になった。

最後の僕をパクリと口の中に放り込むと、山崎さんは「ごちそうさま」と言って手を合わせた。

意識が段々と薄れていく中、僕は思い出した。

（そうだ。昨日の夜、僕は愛する山崎さんに食べられたいって願っていたんだ）

願いが叶ったのだ。

短い人生だったけれど、僕は幸せだった。

１３　デスマンコ（前書き）

死神から得たのはエッチした相手を殺せるあそこだった…

（エロチックホラー）

１３　デスマンコ

朦朧とする意識の中で、“そいつ”は現われた。

「くっくっくっ、薬のＯＤなんかじゃ死ねないぜ。くっくっくっ」

部屋の隅で宙に浮かび、不気味な声で笑う“そいつ”は明らかに人間ではなかった。

ギラギラと光るオレンジ色の瞳。巨大な鷲鼻。耳まで裂けた大きな口の中に並ぶ鋭く尖った歯。ウェーブのかかった漆黒の髪は垂直に逆立っている。二メートル以上もある巨体だが、ピッタリとフィットした黒いスーツを着ている体は異様にスリムだった。

「あんたは誰？」

「俺か？　俺は死神さ」

「死神？　そうか、私を迎えに来たのね」

「違うね。お前はまだ死なない運命だ」

「それじゃ、何であんたが此処にいるのよ？」

「俺が此処にいる理由？　くっくっくっ、これがお前の復讐なのか？」

「うるさいわね。あんたには関係ないでしょ」

「お前が自殺しても、お前の事をもてあそんだ男達は別に何とも思わないさ」

「うるさい！！」

「無駄死にするだけさ」

「黙っててよ！！」

「復讐したいんだろ？　男達に……お前の事をコケにした奴らに」

「それは……」

「俺が手伝ってやるぜ」
「あ、あんたが？」
「あぁ、そうだ。俺がお前にいいモノを授けてやろう」
「いいモノ？」
「くっくっくっ、いいモノだよ。お前の望みを叶えてくれる」
「何よ、そのいいモノって？」
「これだよ」

そう言うと“そいつ”の長い腕が伸びて、女の股間の大事な部分に触れた。

「何するのよ、エッチ！！」
「くっくっくっ、お前に“デスマンコ”を授けてやるのさ」
「何よ、その“デスマンコ”って？」
「ハメた奴を確実に死に至らしめる事が出来るまんこだよ」
「死に……至らしめる？」
「あぁ、そうだ。これがあれば、お前とエッチした男を殺す事が出来るのさ」
「エッチした相手を……殺す……？」
「それも、病死、事故死、自殺、至って自然な死に方だ。相手を殺しても、お前が疑われる事は一切ないぜ」
「どうしてあんたは私にそんなモノを……」
「これは取り引きさ」
「取り引き？」
「あぁ、そうだ。取り引きだよ。人間には最初から決まっている寿命がある。お前が“デスマンコ”を使って相手を殺すと、そいつ等の本来の寿命との差分だけ俺たち死神の寿命が延びるのさ。死神はこうやって、永遠の命を手に入れているのさ。お前は男達に復讐する事が出来て、俺は寿命が延びる。これは取り引きなんだよ」
「ふふふふ」

「何を笑っているんだ」
「夢でしょ。どうせこれは私が見てる夢なんでしょ。いいわよ。あんたと取り引きしてやるわ。私にその“デスマンコ”とやらを頂戴。今まで私の事を散々遊んで捨てた男達に復讐してやるわ。きゃははは、どうせこれは夢なんだもの」
「よし、取り引き成立だ。また会おう。それからな、確実に自殺したい時はな、首を吊るといいぜ。くっくっくっ」
そう言うと死神の姿は消え去り、女の意識も薄れていった。

※※※　　※※※　　※※※

「頭が重い……ここはどこなの？」
「ようやく意識が戻ったわね。ここは病院よ。貴女は救急車でここに運ばれて来たのよ」
病室のベッドの上で横たわる女に看護士が答えた。
「胃を洗浄したからもう大丈夫よ。少し休んだらすぐに退院できるわよ。せっかく助かった命なのだから、もう自殺なんて馬鹿な真似しちゃ駄目よ。いいわね」
「そうか……私、死ねなかったんだ……」
「先生に貴女が目覚めた事を伝えて来るわね」そう言って看護士は病室から出ていった。
女は自殺に失敗して落胆すると共に、生き残れてほっと安堵もしていた。
するると突然、声がした。
「くっくっくっ。言っただろ、お前はまだ死ぬ運命では無いと」

声がした方に顔を向けると、“そいつ”が女を覗き込むようにしてベッドの脇に立っていた。

「あ、あんたは……私はまだ夢を見てるの？」
「くっくっくっ、これは夢じゃないさ。現実だよ。お前と俺が取り引きを交わした事を忘れちゃいないよな」
「取り引き……あれは本当の事だったの？」
「勿論さ」

そこに先ほどの看護士が医者と一緒に戻ってきた。

「気がついたようだね」
「は、はい。ご迷惑をおかけしました」
「今日一日ゆっくり寝てなさい。明日には退院できるよ」
「は、はい」

それだけ告げると医者は看護士と一緒に出ていった。

「あの人達、あんたの事が見えないの？」
「あぁ、普通の人間には死神の姿は見えないよ」
「あんたが言っていた、あの……あの能力は、本当に私に与えられたの？」
「デスマンコの事か？　勿論さ。お前のあそこはもうすでにデスマンコになっているよ」
「嘘じゃないの？　人を殺せるって……エッチをしただけで……相手を……」
「死神は嘘をつけないのさ。勿論、殺せるよ。お前が望むだけでな」
「私が望むだけで？」
「あぁ、望むだけで殺せるよ。復讐したいのだろ、お前をコケにし

た男達を。それにはまずデスマンコの使い方をお前に教えてやらないとな。ちょっと俺について来な」
「どこに行くの？」
「いいから黙ってついて来い。もう歩けるだろ」
　女はベッドから降りると、スリッパを履いてゆっくりと歩きだした。まだ足がフラついている。
　フワフワと宙を浮いて移動する死神の後を追って、病院の廊下に出た。看護士や入院患者らが行き来している廊下を歩いていくと、患者達がたむろしている休憩コーナーがあった。

「あの男」

　死神が患者達の中の一人の中年男性を指差した。頭が禿げあがったメタボ体型の見るからにオヤジといった風情の男性である。
「あの男とエッチしてみな」
「どうして私があんなオヤジとエッチしなきゃならないのよ」
「デスマンコの訓練さ」
「訓練？」
「まずはデスマンコの使い方に慣れないとな。いいか、よく聞けよ。相手を殺したい場合は、エッチをしながら、そいつが死ぬイメージを頭の中に思い浮かべれば良いのさ。心臓麻痺で死んだり、車にはねられたり、ビルから飛び降りて自殺したりな。死ぬ時間も頭の中で思えば、コントロール出来るぜ」
「エッチしながら、イメージすれば良いのね。でも、何の関係もないあのオヤジを殺すのは……」
「気にするな。あいつは胃の調子が悪くて、自分では胃潰瘍だと思って検査入院しているが、実は末期の胃ガンで後三ヶ月の命なのさ。まだ本人は知らないがな。それにあいつは痴漢の常習犯で、まさに

女性の敵だぜ。別にお前が殺したって、そんなに気にするような奴じゃないさ」
「そうなの。判ったわ。でもどうやってあいつとエッチすれば？」
「あいつは相当のスケベおやじだぜ。お前みたいに若くて綺麗な女が、ちょっと色目をつかえば、すぐにホイホイと乗ってくるさ。まぁ、やってみな」
「いいわ。やってみる」

女は死神の言葉に頷くと、中年男性の隣りに座って微笑みかけた。

「どうも初めまして」
「あ、どうも」

いきなり若い女性に話しかけられて、男はびっくりした様子である。

「私、なんか退屈しちゃって」
「俺もですよ。検査入院なので体はピンピン元気ですから、やる事なくて退屈ですよね」
「ピンピンに……元気なんですか？」
「えぇ、そりゃもうピンピンです」
「まだお若いんですね。あっちの方も……」と言って、女は手を男の太ももに乗せた。

男は目を大きく見開いて、信じられないといった表情で女の顔を見つめた。

「私、退屈なんです。ちょっと付き合って頂いても良いですか？」
「も、勿論……」男はゴクリと唾を飲み込んだ。
「それでは、私の部屋に行きましょう」

「は、はい」

女は男の手を取ると、二人は女の病室へと向かった。その二人の後を死神がついていく。

病室に入るとドアを閉め、女はベッドの上に腰掛けた。

「抱いて」

「へっ？」男は狐につままれたようにきょとんとしている。

「早く私を抱いて」

女はそう言うと、患者衣の裾をたくし上げて、下着を脱ぎ去った。露になった女性を局部を見て、男も下着を脱ぎ、ベッドの上にあがった。

「いいのか？　本当に？」

「勿論いいわよ。早く入れて、私の中に」

「こ、こりゃラッキーだぜ。今日の俺は本当についてるぜ」

男は女の上に重なると、あそこの中にペニスを挿入して腰を動かし始めた。

「気持ちいいよ。こりゃ、かなりの締まりだぜ。あんたのあそこは最高だよ」

男は、はぁはぁと荒い息を上げながらも、腰を振り続けている。

「そろそろイメージしてみな」横で二人の行為を眺めていた死神が話しかけてきた。

「何をイメージすればいいの？」

「そうだな。こいつが階段を踏み外して転げ落ちて、首の骨を折っ

て死ぬってのはどうだ？」
「それでいいわよ」
「時間は、お前とのエッチが終わった五分後だ」
「判ったわ。私とのエッチが終わった五分後に階段から転げ落ちて死ぬようにイメージすれば良いのね」

女は、必死になって腰を振り続ける男の顔を下から見上げながら、言われた通りにイメージした。

「で、出る」と言って、男はペニスを引き抜くと、女の腹の上に射精した。
「ありがとな。まさか病院でこんないい思いが出来るとは思ってもいなかったよ。また後であんたとやらせて貰ってもいいかな？」
「いいわよ。何度でも……好きなだけして頂戴」そう言うと、女はニヤリと笑った。
「本当にありがとよ。それじゃ、また後でな」

そう言うと、男は病室から出ていった。
その五分後、病院は騒然となった。
医師を呼ぶ看護士らのあわてた声が、女の病室にまで聞こえて来た。

階段から転げ落ちた男は、首の骨を折っており即死だった。

※※※　　※※※　　※※※

退院した女は、さっそく復讐を開始した。
それは過去に女の体を散々もてあそび、ゴミのように捨てた男性達への復讐だった。
女は、自分の人生が幸せでないのは、全て自分を捨てた男性達の

せいだと思っていた。
復讐は簡単だった。
過去の男達に電話して「一度でいいからまた貴方に抱いて欲しいの。貴方とのエッチがやっぱり最高だったわ」と言えば、男達はホイホイと釣られて女の罠にはまった。
脳卒中、心臓麻痺、電車への飛び込み自殺、首吊り自殺、交通事故……女と関係を持った男達は、女とエッチをして、そして様々の死に方で次々と死んでいった。

そして、最後の一人となった。女が服毒自殺を図ったきっかけとなった男である。
その男は、女が今まで付き合った男達の中でも一番愛した男だった。真面目な性格の男を女は心から信用し、結婚しようと誓い合っていた仲だった。その男が何も告げずに、女の前から突如姿を消したのだった。最も信じていた相手に裏切られて、女は深く傷ついた。
男の携帯に電話をしてみた。この番号に電話をするのは一年振りだった。
呼び出し音が数度鳴って、相手が電話に出た。それは紛れもなくあの男の懐かしい声だった。

「君から僕に電話をくれるなんて本当に思ってなくて……。僕の方から電話をしなくちゃって、ずっと思っていたんだよ。あの時は、本当に悪かった。実はさ……」

男は、女に一年前に起こった事の説明を始めた。突然、会社をリストラされてしまった事。結婚を誓い合っていた彼女に対して、無職となって自信を失い、結婚の約束を果たせないまま、自暴自棄になって、一人旅に出てしまった事。それが彼女との連絡を絶った理由だった。だが今は新しい仕事もみつかり、ようやく自信を取り戻し、彼女に連絡したかったのだが、酷いことをしたので躊躇してい

た事も告げた。
「君に会いたい。もし僕の事を許してくれるのなら、僕と会ってくれないか？」
「いいわよ。会いましょう」

会う約束は交わしたが、女は動揺していた。殺そうと思って電話したのだが、これは予想外の展開だった。

「くっくっくっ、どうする？　殺すのか？」電話を切った女に死神が声をかけてきた。
「うるさいわね。どうしようと私の勝手でしょ。ねぇ、ちょっと教えてよ」
「なんだい？」
「デスマンコってさ、殺したくない相手とエッチしても、相手は死んでしまうの？」
「そんな事はないさ。お前がエッチの最中に相手の死をイメージしなけりゃ、死にはしないよ」
「そうなの。それを聞いて安心したわ」
「くっくっくっ」
「何を笑ってるのよ？」
「いや、別に」

女は男と会った。そこは二人がよくデートをしていた懐かしい街だった。
一緒に食事をして、少しお酒も飲んだ。
男と話している内に、女のわだかまりも徐々に薄れていった。
そして、三軒目に入った洒落たバーのテーブル席で、男は小さな箱を取り出した。

「ずっと君に渡そうと思っていて、渡しそびれていたんだけど……」

それは、婚約指輪だった。

「そんな高いのは買えなくてさ」
「う、嬉しい……」
「許してくれるの、僕の事を？」
「うん。勿論よ」

女は泣いていた。そして、ようやく自分が幸福だと感じる事が出来た。

四軒目、二人はラブホテルに入った。

「君とエッチするのは本当に久しぶりだね」
「そうね。また貴方とエッチできるなんて思ってもいなかったわ」
「僕もだよ」

二人は熱いキスを交わし、体を重ねあった。
それは女にとって、復讐のためでは無い、本当に幸せを感じる事ができるエッチだった。

「気持ちいいよ。君の中に僕が入っている」
「貴方を私の中に感じるわ」

二人は激しくお互いを求め合い、愛し合った。

「最高だよ。嬉しいよ。また君とこんなに素晴らしいエッチができるなんて……なんか今このまま君の上で腹上死しちゃいたい気分だよ、あははは」
「今、このまま私の上で腹上死……」

女の顔が蒼ざめた。イメージしてしまったのだった。
女の体の上には、ぐったりとなった男の体があった。男はもう二度と動くことはなかった。

「くっくっくっ」死神の笑い声が聞こえて来た。
「あんた、こうなる事を知っていて……それで……」
「くっくっくっ」
「ち、ちくしょう！！　あんた、私の事を騙したわね！！」
「騙してなんかいないさ。言っただろ、死神は嘘をつけないってね、くっくっくっ」

しばらくして、バスルームのパイプにバスタオルで首を吊り全裸のままぶら下がっている女の死体の前に死神は立っていた。
「これで取り引き終了だ。デスマンコは返して貰うぞ。それじゃな、くっくっくっ」
不気味な声がバスルームに響き渡っていた。

１４　悪魔の芽（前書き）

修道女を目指す美少女がオナニーを見つかりクリを切除される…

（クリトリス割礼のブラックコメディ）

１４　悪魔の芽

　マリアは純粋無垢な少女。
　白磁器のように澄んだ肌に、金色に輝くブロンドの巻き髪、淡いブルーの大きな瞳は常に潤いを保ち、その整った顔立ちはまるで人形のように美しい。
　マリアが九歳になった年に、戦争で両親を亡くして孤児となり、修道院へと引き取られた。
「マリア、今日からここがお前の家だよ。これからは神に仕え、立派な修道女となる為に修行に励みなさい」
「はい、ミハエル神父さま」
　明るく無邪気な声で返事するマリアの姿を、ミハエル神父は目を細めて見つめ、そして思った。
（なんと綺麗な子なのだろう。この子は将来、きっとすごい美人になるだろうな）
「よいかマリア、修道院で大切なのは『清貧・貞潔・従順』の教えだ。贅沢はせずに質素な食事をし、生涯に渡って清い体を保ち続け、修道会の使命に従って、その身の全てを神に捧げるのだぞ。よいな判ったか？」
「はい、ミハエル神父さま」
　マリアは毎朝早くに起きて、神様にお祈りをすると、修道院の掃除・食事の準備・洗濯・農作業と、休む間もなく、一生懸命に働い

て修行の日々に明け暮れた。
そんなある日の夜、一日の仕事の疲れで早々にベッドに入ったマリアは、偶然にも指先が、股間の『割れ目』の上部にある小さな突起に触れたのだった。
ビクン……体中に電流が流れたような衝撃を覚えた。

(何だろう？)

それは生まれて初めて経験する感覚だった。最初に衝撃が走り、そしてそれが快感へと変化していった。
マリアは、もう一度、指先でその部分に触れてみた。
ビクン……再び、体の中を電気が駆け抜けた。
(ここはいったい何なのかな？　でも……とっても気持ちいいなぁ……)

マリアは指先で、その突起をそっと擦ってみた。
ビクン、ビクン、ビクン。
何度も衝撃が体を襲い、そしてそれが大きな快感となって体を包み込んだ。
(す、すごい……こんなの初めてだぁ……あぁ、気持ちいいよぉ……)

マリアはさらに指先に力を入れ、ぐるぐると回すようにして、肉の突起を擦り続けた。
小さな突起が膨らみ、固くなった。ハァハァと息が荒くなり、顔が火照って上気してくるのが判る。
快楽の昂りはさらに増していき、指先の動きが止まらなくなった。

（あぁ、何だろう……どんどん気持ちが良くなってくるよぉ……体中が熱くなってきたぁ……）

息はさらに上がり、快楽がマリアの全身を包み込んだ。そして、マリアの『女』を中心に、一気に昇り詰めていく感覚が強まってくる。

（あぁ、駄目ぇ……なんか体が変になりそう……頭がぼ～っとしてきた……はっ、はっ、はぁ～ぁ）

頭の中が真っ白になり、マリアの小さな体はベッドの上でビクビクと痙攣し始めた。
マリアは体を動かすことが出来なかった。
今のは、いったい何だったんだろう……快楽の余韻に浸りながら、マリアの意識は薄らいでゆき、そして深い眠りについた。

それからマリアは毎日のように寝るためにベッドに入ると、肉の突起を弄るようになった。神様へのお祈りや修道院の作業と同様に、それはマリアの日課となった。
しかし、それも長くは続かなかった。
いつものように「はぁ、はぁ、はぁ」と声を荒げて、顔を上気させ、ひたすら股間を擦り続けるマリアの姿を、じっと眺める姿があった。それはミハエル神父だった。

「マリア！」

ミハエル神父が、強い口調でマリアの名を呼んだ。
いきなり名を呼ばれ、マリアは慌ててベッドの上で上半身を起こし、声がした方に振り向いた。

「し、神父さま……」
「お前はいったい何をやっているのだ？」
「こ、これは……よく判らないのですが……ここを触ると何故か気持ちがよくなって……」
　マリアはそう答えると、股を大きく広げて『割れ目』を神父さまに見せた。
　ミハエル神父は、マリアの股間に顔を近づけると、じっくりと『割れ目』を眺めた。
「ここのどの部分を触っていたのだ？」
「上の方に尖った所があって、そこを触ると気持ちが良くなるのです」
「上の方とはこの辺りか？」

　ミハエル神父はそう言うと、指先でマリアの『割れ目』を押し広げて、中を覗き込んだ。
　中からは鮮やかな薄桃色をした未発達の女性器が姿を現した。
　そして、その上部にあるピンクの肉芽を指先で弾いた。

「あひゃ～ん」

　敏感な突起部をいきなり指先で弾かれ、マリアは可愛らしい嬉声を上げた。
　神父はさらに、小さな肉突起を指先でグリグリと擦り続ける。
「そほれふ、ひんぷひゃま。あぁ、やめれくらはい。だめれす、あぁ、ひょこはだめれす」

神父に肉突起を弄られて、マリアはベッドの上で体をクネクネとよじらせ悶えている。
そんなマリアの姿を眺めながら、神父は不気味な笑みを浮かべて、さらに弄り続けた。
「ひゃぁん、らめぇ、やめれぇ、いぐぅ〜、いぐぅ〜、いっちゃぅ〜」
マリアは口から涎を垂らして、気を失った。だが、体はビクンビクンとベッドの上で激しい痙攣を繰り返していた。
しばらくしてようやくマリアが目覚めた。ベッドの脇には、厳しい表情でマリアを見つめるミハエル神父がいた。
「ミハエル神父さま……先ほどは失礼しました」
マリアは神父の目の前で醜態をさらしたことが恥ずかしくて、顔を赤らめた。
「良いか、マリア。私の話をよく聞きなさい。お前が触っていた突起、あれは『悪魔の芽』だ」
「悪魔の芽ですか？」
「そうだ。お前の心の中に芽生えた欲望が、悪魔の芽となって現れたのだ」
「私の心の中に芽生えた欲望……本当に？」
「これがその証拠だ」
ミハエル神父はそう言うと、マリアの『割れ目』の下部にある幼い穴に、指を挿し入れた。
「あひょ〜ん」

いきなり膣穴に指を入れられて、マリアは可愛らしい奇声を上げた。
「ほら見なさい、お前の『欲望』の証拠に、この下の口から大量の『涎』を垂らしているだろう」
そう言って、ミハエル神父はマリアの中に入っていた指を見せた、指はヌメった粘液で覆われている。
「お前は『欲望の涎』をダラダラと垂れ流しているのだぞ、マリア」
「も、申し訳ありません、ミハエル神父さま」
マリアはベッドの上で土下座して、神父に謝った。
「幸いにも、お前の『悪魔の芽』はまだ小さい。今のうちに切除してしまえば、大丈夫だ」
「切除……ですか？」
「そうだ。その芽を切り取る」
神父の言葉を聞いて、マリアの顔色が変わった。
(切り取るって……凄く痛そう。でも『悪魔の芽』なのだから、早く取らないと……大変なことになってしまう)
マリアは意を決して、ミハエル神父に応えた。
「よろしくお願いします。どうか私の『悪魔の芽』を切り取って下さい」
「よし判った。ちょっと待っていなさい」

そう言うと、ミハエル神父は部屋から出て行き、ハサミを手にして戻ってきた。
「お前の『悪魔の芽』を切り取るので、割れ目を開けなさい」
「はい、神父さま」
マリアは股を大きく広げると、指で『割れ目』を左右に開けて、肉芽をさらけ出した。
「かなり痛いが声を出さないで我慢するのだぞ。これは神様がお前に与えた試練なのだ。よいな」
「はい、神父さま」
ミハエル神父は、肉芽の皮を剥くと、ハサミの先を押し当て、躊躇することなく、マリアのクリトリスを切除した。
マリアの体に激痛が走った。しかし、神父の言いつけを守り、マリアは歯を食いしばって、声を出さないように必死に堪えた。
「よく頑張ったな、マリア」
「ありがとうございます、神父さま」
ミハエル神父は傷口に薬を塗ると、部屋から出ていった。
その晩、マリアは痛みの為、寝ることができなかった。
ミハエル神父の計らいで、翌日はお祈りだけで、修道院の作業は免除された。
痛みはしばらく残っていたが、やがてなくなり、マリアは『悪魔の芽』から解放された。
そして、数週間後。

夜中に尿意をもよおしたマリアは、トイレに行った。その帰りにミハエル神父の部屋の前を通りかかると、部屋の中から何やら変な声がしてくる。何だろうと思い、マリアは鍵穴から部屋の中の様子を覗いてみた。

するとベッドの上では、ミハエル神父が「ハァハァ」と息を荒げて、股間の何かを右手で激しく上下に擦っている。マリアは目を凝らして、その何かを眺めた。

「まぁ、大変。ミハエル神父さまに、あんなに大きな『悪魔の芽』が。すぐに切って差し上げないと」

その夜、ミハエル神父の悲鳴が修道院中に響き渡った。

１５　幸せな誕生日（前書き）

家族に囲まれた幸せな誕生日を祝った男の末路は……

（せつない系のお話です）

15　幸せな誕生日

「パパ、お誕生日おめでとう」子供達が満面の笑みを浮かべ、手にした画用紙を父親に見せた。
「これ幼稚園で描いたの」
娘が絵を広げて見せる。絵には、父親の似顔絵と「お父さん、ありがと」と、なんとか読み取れるミミズが這ったような文字が描いてあった。

「ありがとうな。お父さんにそっくりだ」
「ねぇ、ボクのも見てぇ」と、弟が姉に競うように、絵を広げて見せる。

そこには、父親の似顔絵らしきものが描いてあった。

「悟史（さとし）の絵、下手くそだぁ」
「下手じゃないもん」
「下手ですぅよぉ〜だ」とと突き放すように姉に言うと、「下手じゃないよね、パパ？」と不安げな表情を弟が見せる。
「あぁ、パパにそっくりだよ」と、男は笑顔で答えて、息子の頭を優しく撫ぜた。
「えぇ、これが？　全然、似てないよぉ」と口を尖らせる姉に、「もう、お姉ちゃんの意地悪」と涙目の弟。
喧嘩する姉弟を見ているだけで男は幸せだった。そんな時間（とき）だった。全てにおいて、満たされていた。それは永遠に続く、幸せな時間……。

「茜、やめなさい。弟をイジメたら駄目でしょ」
　母親が、山盛りのから揚げを乗せた皿を台所から持って来て、テーブルの上に乗せた。
「だってぇ」と唇をさらに突き出す姉に、「さぁ、お食事にしましょ」と、母親が椅子に座る。
「お誕生日おめでとう、あなた。そして、いつもお仕事、お疲れさま」
　妻のふんわりと包み込まれる柔らかな絹のベールのような声と、朗らかで優しい笑みに男は癒され、心の底から「ありがとう」と答えた。
　妻が、男のグラスに赤ワインを注ぎ、二人は「かんぱ～い」と、グラスを鳴らした。
「いただきま～す」の合図と共に、子供達は、から揚げを次々と口の中に放り込んでいく。
　その姿を、男は目元を緩めて、ずっと眺め続けた。
「うちの子達は、本当に食いしん坊だな」
「うふふ。いったい、誰に似たのかしらね？」
「俺って、言いたいの？」
　妻は、黙って微笑みを返した。何年経っても美しい。いつ見ても綺麗だ。男は妻の顔を見つめ、ありがとう、俺は本当に幸せだ、と心の中で呟いた。

「ねぇ、あなた」妻が顔を近づけて、男の耳元でそっと囁いた。シャンプーの甘い香りが鼻孔をくすぐる。
「なんだい？」
「あのね……私、買っちゃた」
「何を？」
「……Tバックの下着」と、妻が恥ずかしそうに答えた。
　妻の頬が薄紅色にほんのりと赤らんでいる。それはワインのせいだけではないようだ。

「えっ？」
「あなた、私に穿かせたがっていたでしょ？」
「あ、あぁ。そうだったな」
「今、穿いてるのよ」
　男の頭に映像が浮び上がった。肉好きの良い、大きくて柔らかな真っ白い桃肉に食い込む真っ黒なTバックが……。
「えっ、えぇぇ？」と驚く男の耳元に、妻はさらに口を近づけると小声で「今夜、子供達が寝たら……ね。たっぷりと、サービスして……あ、げ、る」と、悩ましい声で囁いた。甘い吐息が耳の奥へと吹きかけられる。
「う、うん」と、恥ずかしそうに答える男の頭の中に浮かび上がる、妻の淫らな姿。
　『グチュ、グチュ』と、卑猥な音をたてて、妻が男のイチモツを咥え込んでいる。
　そして、チロチロと亀頭に舌先を這わしながら「ねぇ、あなた。気持ちいい？」と、淫靡な笑みを浮かべて見上げる。妻のその顔は、

母から雌の顔へと変わっていた。
　すると突然、「ねぇ、パパとママ、何のお話してるの？」という娘の声に、男は現実の世界へと呼び戻された。
　ひそひそ話をする夫婦に、娘が怪訝な眼差しを向けていた。

「大人だけの内緒話よ。そうよねぇ、あなた？」
「あぁ、そうだな」
「えぇ、ずる〜い。茜にも教えてよぉ」
　まだ五歳とはいえ、娘は女の勘で、男女の匂いを感じ取ったようだ。

「ボクにも教えてぇ」息子が無邪気に割って入る。
「ダ〜メ」と、母の顔に戻った妻が笑顔を浮かべる。
「えぇ〜」と声を合わせる姉弟に、「そろそろ、ケーキを持ってくるわね」と妻が話題をそらし、台所へと席を立った。
「お前たち、お腹、いっぱいになったか？」
「うん。もう、お腹、パンパン。あぁ〜、しあわせ、しあわせ」
「ボクも。あぁ〜、しあわせ、しあわせ」
「なんだ、そのオバサンっぽいのは？」
「ママの口癖だもん」
「ママの？」
「ゴメンなさいね、オバサンっぽくって」
　妻が笑顔で、ローソクを差したケーキを運んで来て、火を灯した。

「ハピバスデートゥーユー、ハピバスデートゥーユー」妻が歌い出し、子供達も続く。
「パパ、火を吹き消して」

「その前に、写真を撮りましょうよ」
「そうだな。カメラにフィルムは入っているか？」
「勿論。ちゃんと確認済よ」
ケーキを前に、満面の笑みを浮かべた四人が並び、カメラの自動シャッターが落ちた。
しあわせだ。俺はなんて幸せなんだろう、と男は思った。そして願った。この幸せな時間が永遠に続くことを。
その時も、男は本当に幸せだと感じていた。涙が止めどもなく溢れ出た。それは、岩肌を這う清水のように、乾燥して皺だらけになった年老いた頬を潤しながら伝い落ちていった。
そして段々と、男の意識は薄らいでいった。写真を手にした腕が、ゆっくりと床に落ちていく。

※※※　　※※※　　※※※

「はい、事件性は無いと思います。近所の人の話では、かなり衰弱していたようですし」
若い警察官が、無線で話している。
「困るんだよなぁ、こんな所で勝手に死なれてさぁ」
管理人らしき男性が、先ほどからブツブツと文句を垂れている。
「えぇ、状況からして、死後、一週間ほど経っていると思います。とりあえず、署の方へ運んで、検死をするんですね。はい、分かり

ました」
警官が振り向いて、「この方に身寄りは？」と、管理人に尋ねた。
「さぁね。多分、いないんじゃないの。孤独な老人っぽかったからね」
「そうですか……」
「やだねぇ。こういう死に方だけは、絶対にしたくないよ」
「そうですね」
若い警察官は、同情の眼差しで、床に横たわる老人の痩せた死体を見た。そして、その顔を見て、違和感を覚えた。
「でも、この方、何だか幸せそうな死に顔ですよね」
「言われてみれば、そうだな。なんか、微笑んでいるみたいだわな」
「あっ、何か、手に持っていますよ」
警官が、男の手から一枚の黄ばんだ写真をとると、しばらくじっと見つめ、管理人に見せた。
管理人は、それを見て、ポツリと呟いた。
「幸せな誕生日だったんだな」
写真には、誕生日ケーキを前に、満面の笑みを浮かべた家族四人が写っていた。

１６　馬鹿だよ、お前は（前書き）

淡い初恋の相手と結ばれた二人だが、彼女はもうすでに……
（せつない系のお話です）

１６　馬鹿だよ、お前は

晩夏の昼下がり。姦しい蝉しぐれが、脳みその奥へとじんわり沁み込んでくる。

屋上から眺める景色は、まるで神の目線のようだった。黒い服を着た人々が、ゆっくりと動いている。

終わりに近いとはいえ、夏の太陽の強い光が、情け容赦なく学生服の黒に吸収され、玉のような汗が次々と吹きだしてくる。

「勃ったよ」亜樹が、涼二の股間から顔を上げた。

ファスナーの間から飛び出している涼二の分身は、青い空を仰いでいた。

亜樹の唾液を全体に纏って、テカテカと光り輝いている。

「本当にいいのか？　俺なんかでいいのか？」

「また訊いた。これで三度目だよ。だから言ってるでしょ。涼ちゃんじゃないと駄目なの」

「だって、お前。初めてなんだろ？」

「そうだけど……もう意味ないじゃん。今さら」

「そりゃそうだけどさ……」

「さっさとやろうよ。もう時間もないし」

亜樹はそう言って、セーラ服の中に手を入れて、下着を脱ぎ出した。

亜樹の手に握られたピンク色のパンティを見て、涼二は覚悟を決めた。

亜樹は屋上の手すりをしっかりと握り締めると、涼二に向けてお尻を差し出した。
涼二がセーラ服のスカートをめくり上げる。
差し込むような強い日差しの中、真っ白い尻肉が日の光を浴びて、まぶしく輝いている。
涼二は、亜樹の双丘の柔肉を両手で掴み、指先に力を入れた。するとそれは、掌の中で意のままに形を変えていく。
桃の中心には、菊の花が咲いており、その下には神秘の淫泉が、涼二を待っている。
その穴に狙いをすました。泉の中心部だ。

「いくぞ。本当にいくぞ」
「いいから、早くして」

涼二は、そそり立つ肉棒で、亜樹の中心を突いた。

「う、ううっ」亜樹が、くぐもった声を漏らす。
「大丈夫か？　痛くないのか？」

初めての男を迎え入れた処女穴は、精一杯の抵抗で、涼二の侵入を拒もうとする。

「平気だよ……痛くない……だから続けて……奥まで入れて」

亜樹は、自らを励ますかのように、呟いた。
涼二は、腰に力を込めて、更なる侵入を続ける。
一センチ、一ミリづつ、涼二は亜希の中へと入っていった。
挿入開始から一時間以上経ったような気がした、だがそれはほんの数分の出来事だった。涼二は、完全に亜樹の中に入っていた。二人は深く結ばれた。

「やっと涼ちゃんとひとつになれたね」
「えっ？」
「私ね、ずっと涼ちゃんとこうなることを願っていたの」
亜樹の中は、とっても温かかった。それはまるで、生きているかのような温かさだった。
涼二の瞳から、涙が溢れ出してきた。とめどもなく溢れ出る。止めることはできなかった。

「馬鹿野郎、どうして……どうして死んじゃったんだよ！」
涼二は、亜樹に叫んだ。悲痛な叫び声だった。

「ごめんね、涼ちゃん」
亜樹は、悲しい声で謝った。

「本当に……馬鹿な死に方しやがってよ」
「歩きスマホで、車に轢かれて、即死」
「しかも、相手はトラックなんだぞ」
「あれって、マジで危ないから。涼ちゃんも気を付けてね」
「お前が言うと、スゲー説得力があるよ」
「だよね」

バックから膣奥をグイグイと突かれながら、亜樹はニャハハと悲し気な笑い声を上げた。
「いったいスマホで、なにを見てたんだよ」

涼二からの初デートの誘いに、返信しようとしていたとは、亜樹には言えなかった。
建物の中から、ぞろぞろと人が出て来た。その多くは学生服やセーラ服を着ている。
「そろそろ時間みたぃ。私、もう逝かなくちゃ」
「俺も、逝きそうだ」
「いいよ。きて。いっぱい出して。私の中に、いっぱい出して」
涼二は、腰の動きを早めた。
パン、パン、パンという肉のぶつかる音が、湿った夏の空気の中にこだましている。
そして涼二は、「うっ、ううっ」というくぐもった声と共に、亜樹の中に精を放った。
「あぁ～っ、涼ちゃんの精を感じる」
亜樹が嬉しそうな声を上げた。
「ごめん。中で出しちゃった」
「いいよ。今さら、そんな心配しなくても」
そう言って亜樹は、ケラケラと乾いた笑い声を上げた。
真っ黒な車のクラクションの音が、晩夏の空にもの悲しく響いた。
「それじゃね、涼ちゃん」
亜樹は、笑顔を浮かべて、涼二に手を振った。

「馬鹿やろう！　何で死んじゃったんだよ！」
亜樹は、黙ったまま、悲しい笑顔を浮かべた。
「そうだ。お前さ、このまま幽霊になって、俺に憑けよ。一生、俺に取り憑けよ。俺は……それでも構わないから」
亜樹は、寂しげに首を横に振った。
「幸せになってね。私のことなんか、さっさと忘れてね」
「馬鹿野郎、ふざけんなよ！　お前のことを忘れられるわけないだろう！」
「ありがとう、涼ちゃん。本当にありがとう……私、しあわせだよ」
亜樹は、その大きな瞳から、溢れるように涙を流していた。
涼二は、手を伸ばして、亜樹を逃すまいと、掴もうとした。しかし、その手は宙を彷徨った。
亜樹の姿が、段々と薄くなり、消えていく。

「さようなら、涼ちゃん」

それが、亜樹の最期の声だった。

霊柩車が、火葬場に向けて、ゆっくりと走りだした。
晩夏の重たい空気の中、きゃーっ、というクラスメート達の悲鳴のような嘆き声が響き渡っていく。大勢の人々が、泣いていた。心の奥底から、亜樹の早すぎる死を嘆き悲しんでいた。
涼二は、屋上の欄干を力一杯握り締め、青い空に向かって大声で叫んだ。

「馬鹿だよ、お前は！」

１７　修羅場の夫婦（前書き）

若い男を連れ込んだ妻が、夫の浮気現場に鉢合わせて発生するドタバタ劇……

（コメディ作品です）

17　修羅場の夫婦

ブラを外すと、豊満なバストが飛び出した。質量があるにもかかわらず、重力に逆らって、その円錐形の形を保っている。結局、子供は出来なかった。だから小ぶりの乳首は淡いピンク色のままで、ぷっくらとした乳輪の中央に鎮座している。

遠山夏子（とうやまなつこ）は鏡に映る我が姿を見つめた。毎日のようにジムに通って鍛えているので、お腹も出ていない。いや、それどころか、縦筋が入っている。お尻だって、最近は重点的に鍛えているので、プリっと引き締まっている。とても四十二歳の体には見えない。

（まだまだイケている。私は、いい女だ）

夏子は、自分にそう言い聞かせた。そう、これから私は……。

「いい形のおっぱいですね」

鮫島遼（さめじまりょう）が、その大きな手で、夏子の乳房を揉み上げた。柔らかい肉が、手の中で自由自在に形を変えている。乳首が固くなり、尖り始めている。

遼は、夏子を背後から抱きしめ、その首筋に優しくキスを落とした。

遼はすでに服を全て脱いで全裸になっていた。股間の中心が固くなり、夏子の柔らかい尻肉に当たっている。

「待って。シャワーを浴びてからにして」

遼が両腕の錠を解いて、夏子を自由にした。

「焦らないでね。時間はたっぷりあるから。旦那は今夜は帰りが遅いの」
遼が、ニヤリと笑みを浮かべた。
「一緒にシャワーに入る？」
「いいです。自分、ジムでシャワーを浴びて来たので」
「それじゃ、私は軽くシャワーを浴びるから、先に寝室へ行って待ってて」
「了解っす」
遼はマンションの廊下を奥の寝室へと向かった。ジムのトレーナーだけあって、鍛え上げられた肉体は逞しい筋肉で覆われ、日焼けした褐色の肌がその造形を際立たせている。
遼が寝室の扉を開けた。

「キャァ～」
けたたましい女性の悲鳴が、マンションの室内に響き渡った。
遼が「うぉ～」と大声で叫び、廊下に尻もちをついた。
バスタオルを体に巻いて、夏子が急いでやって来た。

「いったいどうしたの？」
「誰かが部屋の中に」と、遼が室内を指差した。
夏子が寝室の電灯をつけた。
寝室には二つのベッドが置いてある。
奥のベッドの上には全裸の男が横たわっており、そのでっぷりとした腹の上には、両腕で胸を隠した、若い女性が跨っていた。

男は夏子の夫の冬雄（ふゆお）だった。
「あなた、何をやってるの！」
「何って……つまりだな」
「説明しなくていいわよ。この状況を見りゃ分かるから。いったい誰なの、その女？」
「か、彼女はだね……その、何というか」
「光武（みつたけ）商事営業部の西野詩織（にしのしおり）と言います。こんな格好で失礼します。遠山部長にはいつもお世話になっております」

詩織はペコリと、夏子に頭を下げた。

「ふん。お世話って、いったいどんな世話なんだか」
「お前こそ、そのフリチンのムキムキ男は何なんだ？」
「鮫島遼です。ジムのトレーナーをしています」
「お前、今日から旅行に行くって言ってなかったか？」
「それは明日でしょ。あなたこそ、今夜は接待で遅くなるって言ってたくせに。それよりも、いつ迄その恰好でいるのよ！　早く離れなさいよ！」
「それが、出来ないんだ」
「はぁ？　なに言ってるの？」
「そいつが急にドアが開いたので彼女が驚いて、膣痙攣を起こしたみたいで」
「抜けなくなっちゃったんです」と、詩織が情けない声を上げた。
「何それ？　あなた、ふざけてるの？」
「マジだよ。信じてくれ」

遼が、二人の結合部を覗き込んだ。

「こりゃ、根本までずっぽりと入っていますね」

「やだぁ～。恥ずかしいから、そんなにジロジロと見ないでくださいよぉ～」
「とりあえず引っ張ってみましょう。それで外れるかもしれません」
遼が詩織の腰に手を回して、力いっぱい引き上げた。だが、冬雄の腰も一緒に浮き上がってしまう。
「一緒に上がっちゃうなぁ。夏子さん、旦那さんの上に乗ってくれますか？」
「えぇっ、私が？」
「じゃないと、ずっとハマったままですよ」
「もう仕方ないわねぇ」
夏子がしぶしぶと、冬雄の腹の上の跨って座った。
「お前、重たくなったなぁ」
「うるさいわ！」
「それじゃ、引き上げますよ。せ～の」
遼が、先ほどよりもさらに力を込めて、詩織を引き上げた。
「イタた。イタた。モゲちゃう。モゲちゃう。チンコがモゲちゃう」
冬雄が苦痛の表情を浮かべた。
「駄目だこりゃ。かなりキツく締ってますねぇ」
「くすぐってみたら？　笑った拍子に緩んで抜けるかもよ」と、夏子が提案した。
「それは、いいアイデアですね。やってみましょう」
遼が、詩織の脇腹をくすぐり始めた。
詩織が「駄目ぇ、そこは駄目ぇ～」と笑いながら、体を捩らせた。

「イタた。イタた。締る、ギュウギュウ締ってるぅ」冬雄が苦痛の表情を浮かべた。

遼は、くすぐるのを止めた。

「脇腹は、私の性感帯なんですぅ」と、詩織。
「困りましたねぇ。どうしましょうか、夏子さん」

夏子は、結合状態の冬雄と詩織を見て、大きなため息をついた。

「なんか無性に腹が立ってきた。遼くん、エッチしよう」
「えっ？　今、ここで？」と、遼が目を丸くする。
「目には目を、歯には歯を。エッチにはエッチよ」
「なんだその理屈は。意味分かんないぞ。お前は、亭主の目の前で浮気するつもりか！」
「あなたこそ、そんな恰好で、よく言えるわね！」
「こ、これは……不可抗力で……」

夏子はベッドの上に横たわって、バスタオルを剥いだ。

「さぁ、来て」
「本当にいいんですか？」
「いいから、来て！」
「それじゃ失礼して。奥さんをお借りしますね」と、遼は冬雄に頭を下げた。
「おい、こら！　誰が貸すと言った！」

夏子は、冬雄に見せつけるように、遼のペニスを口に含んだ。
ねっとりと舌を亀頭に絡ませる。粘膜の橋が、唇と先端を結んで

いる。
舌先を肉竿に這わす。丁寧に何度も上下する。
時おり、冬雄を見ては、挑発的な微笑みを投げつけた。
「わぁ、奥さま、フェラがお上手ですねぇ。とっても勉強になります」
「俺は、あんなこと、あいつにやって貰ったことないぞ」
遼のペニスが勃起した。太い筋が何本も浮き上がっている。
「わぁ、すっごい大っきいぃ。逞しいぃ〜」と、詩織が声を弾ませる。
グチョグチョと、夏子の発するフェラ音は、一段とボリュームが上がっていく。
「デカいわぁ。誰かさんのとは、大違いよね」
「う、うるさい！　俺のだってな、抜けなくなるぐらい、デカいんだ」
「それは、私の締りがいいからですよぉ」
そう言った詩織の目は、物欲しそうに遼の股間に釘付けになっている。
「さてと、準備オッケーね」
夏子はベッドに横になると、両脚を大きく開いた。
「さぁ、来て。その大きいのを、私のあそこにズボっと入れてちょうだい」

「了解っす」
遼は夏子の両脚の間に入ると、最大限に膨張した肉竿を淫穴に、ズブリと突き刺した。
「キター！　入ってキター！」と、夏子が叫ぶ。
遼は、ガンガンと力強く腰を振り始めた。
「凄〜い。いいわぁ。最高ぉ。こんなの初めてぇ」
夏子の声のボリュームは、どんどんアップしていく。
「おいこら！　俺の前で当てつけがましく喘ぐな！」
「ブヨブヨの体と違って、鍛え上げられた体はやっぱり凄いわ」
「そんなにいいんですか？」と、詩織。
「いいわよぉ。もう、感じ過ぎちゃって、どうにかなりそう」
「いいなぁ。私も感じたぁ〜い」と、詩織がポツリと呟いた。
「ちくしょう！　離婚だ！　お前とは、もう離婚だ！」
「いいわよ。いつでも離婚届に判を押してあげるわ！」
冬雄は、詩織の瞳を、真剣な眼差しで見つめた。
「妻とは別れる。だから俺と付き合ってくれ」
夏子も、遼の目を見つめて、満面の笑みを浮かべた。
「遼くん、私とお付き合いしましょうね」
だが詩織は、両手の手のひらを左右にひらひら振って「無理です

ぅ」と拒否した。
「遠山部長とは、浮気だから付き合っているんですよ。二十歳も年上の男性と真剣交際なんて、マジで無理。無理、無理、無理。絶体に無理」と、必死に否定する。
否定するたびに、小ぶりのおっぱいが、プルンプルンと揺れた。
「あはは。スケベ親父が、小娘にもて遊ばれてやんの」と、夏子が嘲け笑う。
「俺も無理ですよ。夏子さんとのセックスはジムのトレーニングの延長みたいな物ですから。それに俺、彼女いるんで」
笑っていた夏子の顔が、呆然とした表情に一変した。
「ははは。お前もな」
今度は冬雄が、嬉しそうに嘲りの表情を浮かべた。
「あっ、抜けた！」と、詩織が声を張り上げた。
「君のさっきの一言で、萎えちゃったからね」
冬雄のイチモツは、平常時のミニサイズへと戻っていた。
「それじゃ、私、帰りますね」と、詩織は寝室内に脱ぎ散らかした下着と服を拾い集める。
「では、俺も帰ります」と、遼。
詩織は、遼と一緒に部屋を出て行きながら、遼の胸筋を触って「凄い筋肉ですね」と、言った。

遼は、ピクピクと胸筋を動かして「どうです？　口直しに俺と一発？」と、言った。
「えぇ〜。だって、彼女さんがいるんでしょ？」
「別に結婚してる訳じゃないし。君だったら、乗り替えてもいいかな」
「う〜ん。どっしようかな〜」と答えながら去っていく詩織の声は、まんざらでもなさそうだった。

そして、冬雄と夏子が寝室に取り残された。
しばらく沈黙が続いた。そして、ようやく冬雄が重い口を開いた。
「御免な。俺さ、単調な結婚生活に何か刺激が欲しかったんだよ。でもさ、よく分かった。俺に一番必要なのは、夏子、お前だって」
「私も……以下同文」

天井を向いたまま、二人はベッドに横たわった。

「なぁ、夏子」
「なぁに？」
「久しぶりに、やろうか？」

夏子は冬雄の股間を見た。イチモツが元気に天井を仰いでいる。
「まぁ、もうこんなに元気になってる。いったいどうしちゃったの」
「お前がさ、ムキムキ男にやられているのを思い出したら、こんなになっちゃった」
「はぁっ、てめぇ〜、そっちかよ！」

18　獲物（前書き）

南の島で二人の日本兵が狙う獲物とは？
※これは読んだら厭な気持になれる小説です。

１８　獲物

藪の下で二人の兵士は待っていた。もうすでに二時間、腹ばいの姿勢のまま、ずっと待っていた。南の島のジャングルの粘りつくように蒸した土の濃厚な匂いにむせ返りそうになっても、巨大なムカデが手の甲で蠢いても、男達はただひたすら耐え、待ち続けた。ついに沈黙に耐えかねたのか、奥平が口を開く。

「柿本、お前の家は確か農家だったな」
「はい、伍長殿。福島の貧乏百姓の五人兄妹の下から二番目です」
「そうか。今だと、ちょうど稲刈りの時期だな」
「そうですね……」

黄金色に染まった田んぼで、腰を折って稲を刈る年老いた両親と、健気に農作業を手伝うまだ十四歳の妹の姿が瞼に浮かんだ。妹は、歳が一番近いせいもあり、柿本と仲がよかった。幼い頃から、お兄ちゃん、お兄ちゃんと、甘えた声で柿本にまとわりつき、二人はいつも一緒に遊んでいた。部隊の仲間は戦闘や病気、そして飢餓で、大勢死んでしまった。この島に残された者はもうあと僅かだ。このまま妹には会えないのだろうか。故郷の景色をこの目で見ることは、二度とは無いのだろうか。そう思うと、柿本の目頭が少し熱くなりかける。それを払拭するかのように、柿本は言葉を続けた。

「伍長殿は何をされていたのでしょうか？」
「俺は猟師だった。秋田でマタギをしていた」
「マタギですか」柿本は尊敬の眼差しで奥平の精悍な横顔をちらりと眺め「だから射撃の腕が」と納得したようにうなずいた。
奥平は遠い昔を懐かしむように呟く。

「これからの時期はイノシシが美味い。冬に備えてドングリをたらふく食べ、たっぷりと脂肪を蓄えてさ。その肉を鍋にするとな、脂肪が汁に溶け出してよ。濃厚な汁が舌に絡みつくように甘くてよ。たまらなく美味いぞ」

柿本は溢れ出る唾を喉奥へと押し込んだ。腹が鳴った。この数日、ろくに食べていない。

「シカはな、春が美味いんだ。若草をふんだんに食べたシカが一番美味しい。それも雌だな。若い雌ジカの肉をゆっくりと炭火で炙ってよ。そりゃもう柔らかくてさ。噛み締めると甘い肉汁が口の中に広がるように滲み出してきてな。ありゃ本当に美味かったなぁ」
「シカは自分も食べたことありますけど、生臭くて苦手でした」
「それはな、処理の仕方が悪かったんだ。殺したらすぐに血を抜くんだ。そうすると臭みが抜ける」
「そうなんですか」と答えた柿本の腹がまた鳴った。空腹で意識が朦朧としてくる。

突然、前方で音がした。草をかき分けるような音だ。

「来たぞ。獲物だ」

二人の兵士に緊張が走った。いよいよ待ちに待った瞬間だ。二人は前方の茂みに意識を集中する。絶対に獲物を逃すわけにはいかない。

「雌だ。それも若い雌だ」奥平の声が興奮で弾んでいる。

獲物が近づいてくる。まったく警戒していない。奥平は慎重に息を吐いて呼吸を整え、三八式の照準を獲物へと正確に合わせる。ま

だだ。もう少し近づけさせないと。絶対に外さないぞと、祈るように誓った。
　ふっと獲物が頭を上げた。目が合った。怯えた悲しい目をしていた。奥平の銃が吠えた。

「やったぁ。仕留めましたね。お見事です、伍長」
　奥平は満足げにうなずいた。自然と微笑みがこぼれた。
　二人は倒した獲物に近づいて、見下ろした。

「まだ若いな」
「十三、四歳というところでしょうかね」
　左の乳房に、小さな口を開けた銃創から、大量の血を吹き出して、褐色の肌をした少女が地面に倒れている。まとっているのは腰ミノのみ。原住民の少女だ。

「すぐに処理するぞ」と言った奥平に、柿本が「あの、伍長殿……」と伺うように小さな声を発した。
「やりたいのか？」との問いに、柿本は恥ずかしそうにうなずいた。
　奥平は吐息して「時間がない。さっさと済ませよ」と笑った。
　柿本は溢れんばかりの笑顔を浮かべ、ズボンのベルトを慌てて外すと、一気に下ろした。すでにそこは、隆々と立ち上がっている。
　柿本は少女の両脚を大きく広げ、中を覗き込んだ。褐色の肌にまばらに生えた縮毛から、生鮭色をしたまだ幼い秘裂が姿を晒している。
「ベッチョだ。久しぶりのベッチョだよ」歓喜の声を上げた柿本は、両脚の間に体を入れようとして、ふと動きを止め、奥平を見上げた。
「伍長殿は？」

「俺はいい。早く済ませろ」
「はい。わかりました」

奥平の声に飛び上がるように答え、柿本は少女の膝をつかんで広げると、体を入れた。
全く濡れていない未開の幼洞に、太太と猛り勃つ柿本の欲棒が、強引に押し込まれ、少女の股間を乱暴に引き裂いた。だが少女は、苦痛の悲鳴を上げることもなく、虚ろな瞳でただ悲しそうに柿本を凝然と見上げている。
少女の中はまだ温かかった。優しく包む込むように、柿本を迎え入れた。女性経験の少ない柿本にとっても、それは、生きることの喜びを感じさせる、久しぶりの感触だった。
柿本は必死になって腰を動かした。
大量の汗を滝のように吹き出しながら、尻を丸出しにして獲物の上で懸命に腰を振っている、その微笑ましい光景を眺め、奥平の頬が緩んだ。
酸化した鉄のような生臭い血の香りが、あたり一面に広がっていく。

すると、「で、出る。出ます」と叫んで、柿本が少女の中に精を放った。

すっきりとした表情を顔に張り付けて、柿本が体を起こしてズボンを上げると、奥平が大きなナイフを取り出して、少女の頭を切り落とした。
そして木に逆さに吊るして血を抜くと、腹にナイフを入れて、胃、肝臓、腸、子宮と内臓を次々に取り出していく。マタギならではの手慣れた解体作業に、柿本は惚れ惚れと見入った。

ものの三十分ほどで、少女は食材へと変わった。

「さあ、帰ろう。みんな、待ってるぞ」
「はい、伍長殿。今夜は焼肉ですね」
　久しぶりに腹いっぱい食事をして満足そうな笑顔を浮かべている部隊の仲間達の姿を思い浮かべ、柿本はとても幸せな気持ちになった。